Ⅰ　研究主題の設定及び調査研究内容

１　研究テーマ

「家庭に関する学科の魅力ある取組の可視化　～働き方改革との両立を目指して～」

２　研究の趣旨

本部会家庭科調査研究委員会では、平成 23 年度に「高等学校家庭科におけるキャリア教育・職業教育の在り方に関する調査研究」をテーマとした報告書をまとめた。その結果をみると、高校時代の思い出では、「家庭科技術検定関連」が最も多く、次いで「良い人間関係（教師・友人）」「学校家庭クラブ活動」「家庭科専門科目の授業」の順となっている。また、高校時代の家庭科の学びは、「今の仕事に大いに役立っている」「今の仕事と生活に役立っている」と回答している。「今の仕事や勉強に役立っている学科の学び」は、多い順に「家庭科専門科目の授業」「家庭科技術検定関連」となっている。インタビューのまとめには、「全ての卒業生が、現在の生活に高校時代の家庭科の学びが役立っていると答えている」とある。

そして、家庭に関する学科では、今日、より一層、学科の特色を生かした多岐にわたる魅力ある教育活動を行っており、生徒は高校３年間の教育活動を通して大きく成長していると考えられる。しかしながら、募集定員に対して定員割れが生じたり、家庭に関する学科が閉科となったりする例もみられる。また、家庭科教員は、高い専門性が求められる一方で、業務負担が少ないとはいえず、「働き方改革」を更に進めることが課題と考えられる。

そこで、アンケート調査を通して、家庭に関する学科の教育活動の成果と課題を把握し、学科の魅力を可視化して、その振興に資するとともに、「働き方改革」の一助となることを研究のねらいとした。

３　調査研究内容及び方法

（１）アンケート調査

①調査期間　　令和４年 12 月 7 日～令和５年１月 18 日

②調査対象校及び対象者

家庭部会会員校のうち家庭に関する学科を設置する高等学校 233 校

・校長及び家庭科教員３名（学科ごとに学科主任 他２名）

・家庭に関する学科の生徒（高校３年生全員：令和２年度入学生）

③主な調査内容

［校長］

・家庭に関する学科の概況（定員、入学者選抜状況、家庭科教員数、実習助手数）

・家庭に関する学科の魅力・特色づくり

・教育活動に関わる情報発信

・働き方改革

［教員］

・「やりがい」「不安・負担」「生徒の成長」の視点での家庭に関する学科の教育活動

・超過勤務と業務負担軽減

・家庭に関する学科を設置校勤務の感想

［生徒］

・高校進学に際して志望校・志望学科決定時に参考とした情報や活動等

・家庭に関する学科を志望した理由

・３年間の学びで自らの成長を感じたものやよかったと感じること

（２）実践事例の収集

①テーマ　　「家庭に関する学科の特色ある取組について」

②方　法　　アンケート調査項目「貴校の家庭に関する学科の特色や魅力について」の自由記述をもとに選出した９校に執筆依頼

Ⅱ　調査研究委員会活動

１　調査研究の期間

令和４、５年度の２年間

２　調査研究委員会の構成

名　　前	所　属　校	備　　考
地主　佳子	山形県立荒砥高等学校	令和４～５年度
飯塚　晃代	栃木県立佐野東高等学校	令和４年度
萩原　明子	茨城県立結城二高等学校	令和５年度
池田　　靖	埼玉県立越ヶ谷高等学校	令和４～５年度
都丸　輝信	千葉県立八千代高等学校	令和４～５年度
羽佐田透一	愛知県立安城高等学校	令和４～５年度
若松　明子	兵庫県立北須磨高等学校	令和４～５年度（委員長）

３　調査研究委員会の主な活動

《令和４年度》

第１回　　令和４年７月１日（金）
- 調査研究方針及びテーマの設定等

第２回　　令和４年８月 23 日（火）
- 研究内容及びアンケート調査内容等の検討

第３回　　令和４年 11 月 18 日（金）
- アンケート調査内容等の検討

第４回　　令和５年１月 30 日（月）
- アンケート調査に基づく実践事例執筆者の選定等

《令和５年度》

第１回　　令和５年６月 27 日（火）
- 報告書の内容・構成、アンケート結果の分析等

第２回　　令和５年８月 30 日（水）
- アンケート結果の分析

第３回　　令和５年 10 月４日（水）
- 実践事例の確認、アンケート結果の分析・考察

第４回　　令和５年 12 月７日（木）
- 報告書の検討

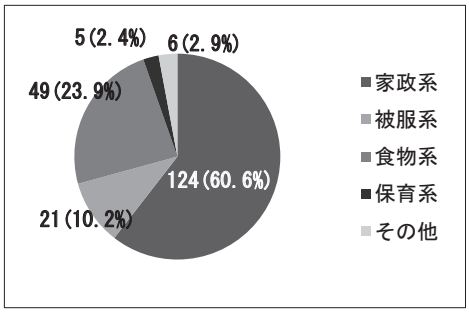
Ⅲ　家庭に関する学科設置校を対象とする調査結果及び分析・考察

校　長

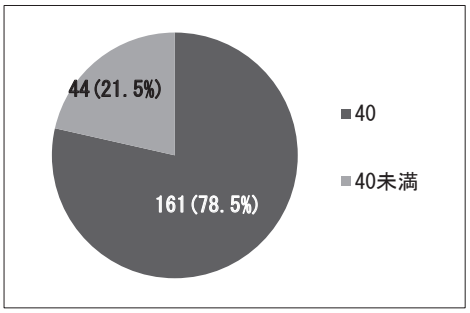
アンケート依頼校数　233 校
回答校数　179 校（回答率　76.8%）
［１学科設置校 158 校、２学科設置校 16 校、３学科設置校 ５校　計 205 学科］

１　家庭に関する学科について

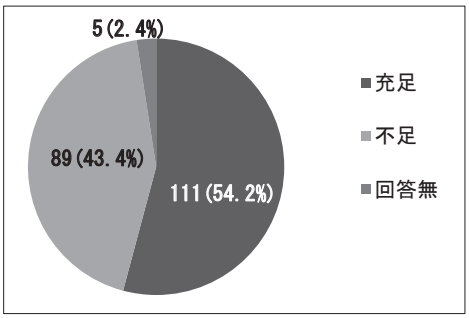
【設置学科(校)】



【１学級の定員数(人)】

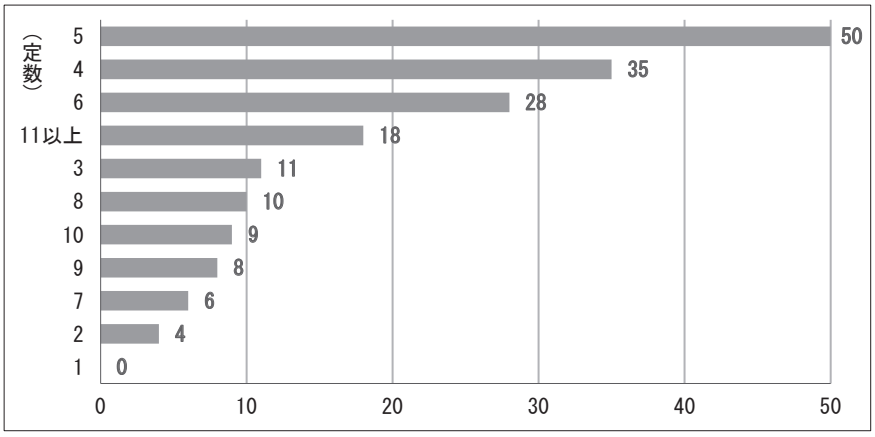


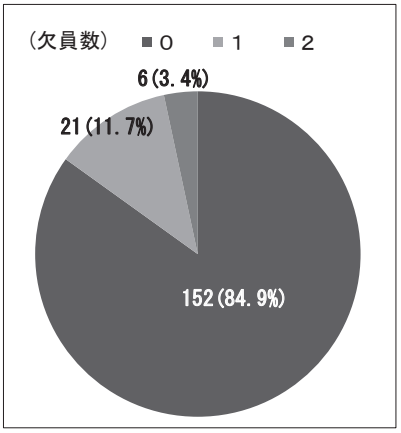
【入学者選抜状況(校)】(令和４年度入学生)



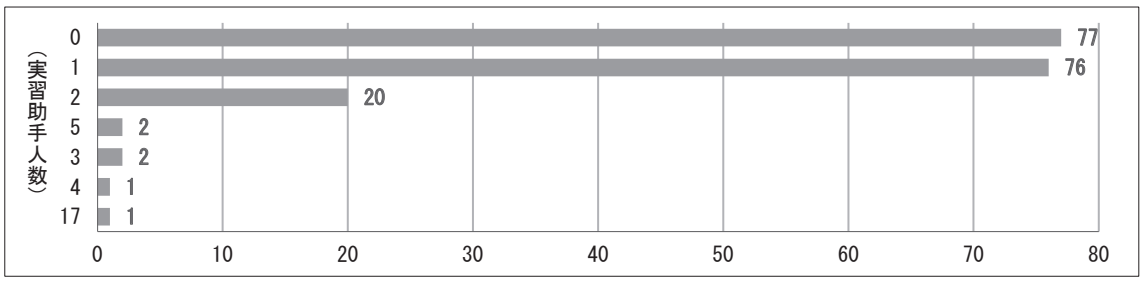
・設置学科は、「家政系」が最も多く 124 学科（60.6%）、次いで「食物系」49 学科（23.9%）、「被服系」21 学科（10.2%）であった。
・１学級の定員数が 40 人未満の学科は、44 学科(21.5%)であった。その内 35 人定員が 10 学科、30 人定員が９学科であった。
・定員を充足していないのが、半数近くの 89 学科(43.4%)であった。

【家庭科教員定数及び欠員(校)】(有効回答数 179 校)





【家庭科実習助手人数(校)】(有効回答数 179 校)

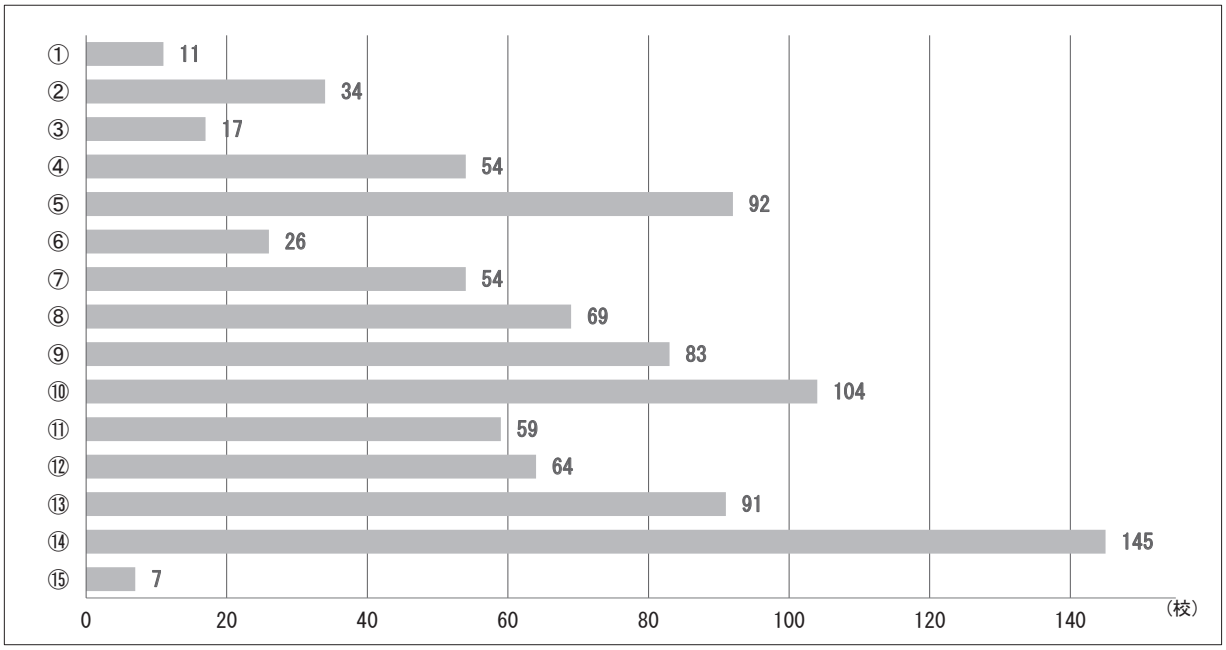


家庭科教員定数に対して欠員のある学校は、27 校（15.1%）であった。家庭科実習助手のいない学校が、77 校（43.0%）であった。いずれも多忙化解消に向けて大きな課題であると考えられる。

２　家庭に関する学科の魅力・特色づくりについて

（１）魅力・特色づくりとして取り入れたい・充実させたい内容　（複数回答可）

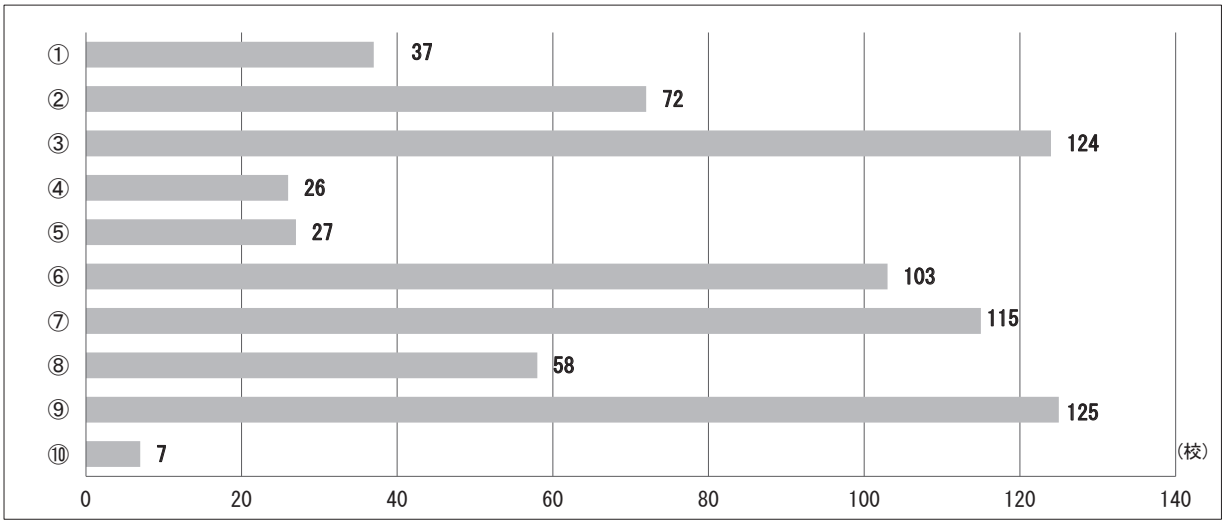
① 国や県等の研究指定制度の活用　② 家庭科関係コース制の充実　③ 学校設定科目の設置
④ 少人数授業やティーム・ティーチング　⑤ 各種学科関連行事の充実
⑥ ホームプロジェクトの活性化や実績の向上　⑦ 学校家庭クラブ活動の活性化や実績の向上
⑧ 家庭科技術検定の活性化や実績の向上　⑨ ボランティアやインターンシップ等の体験活動
⑩ 進路指導（進学・就職）における実績向上　⑪ ＩＣＴ環境の充実　⑫ 施設・設備や周辺環境の充実
⑬ 大学や企業との連携　⑭ 地域との連携・交流活動　⑮ その他



「地域との連携・交流活動」が最も多く（145 校）、次いで「進路指導（進学・就職）における実績向上」（104 校）、「各種学科関連行事の充実」（92 校）が多かった。それらに次いで多かったのが、「大学や企業との連携」（91 校）、「ボランティアやインターンシップ等の体験活動」（83 校）であることから、地域や外部機関等との連携によって、魅力・特色づくりを進めたいと考えている校長が多いことが分かった。

（２）魅力・特色づくりを推進していくうえで必要と考えること　（複数回答可）

① 国や県の施策　② 校長のビジョンやリーダーシップ　③ 職員の共通理解、意識改革
④ 大学入試制度の多様化　⑤ 各学校の自由裁量権の拡大　⑥ 財政的な裏付け
⑦ 情報発信の充実　⑧ 保護者の理解と協力　⑨ 地域社会の理解と協力　⑩ その他

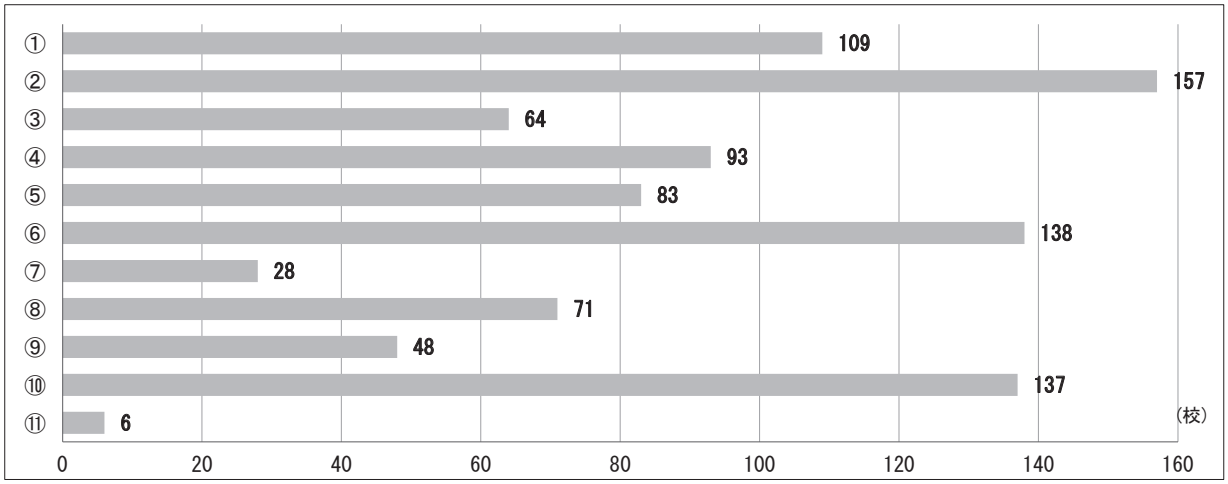


「地域社会の理解と協力」（125 校）、「職員の共通理解、意識改革」（124 校）が特に多く、次いで「情報発信の充実」（115 校）が多かった。職員の共通理解を図りながら、情報発信を充実させ、地域社会の理解と協力を得ることが必要であるという校長の意向が伺える。また、「財政的な裏付け」（103 校）も多く挙げられた。

３　魅力・特色ある教育活動に関わる情報発信について　（複数回答可）

【発信方法の中で特に重視しているもの】

① 学校案内　② 学校ホームページ　③ ＳＮＳ（学校・学科）　④ マスコミ（新聞等のマスメディア）
⑤ 中学校訪問　⑥ 中学生体験入学　⑦ 公開授業　⑧ 学校祭等の一般公開
⑨ 学科関連行事への招待　⑩ 地域との連携・交流活動　⑪ その他（具体的に記入）

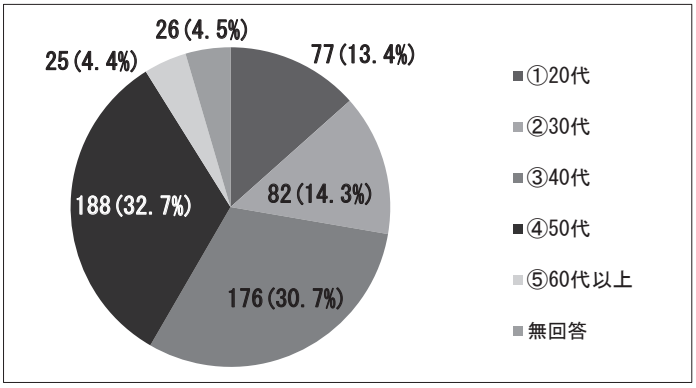


「学校ホームページ」（157 校）が最も多く、次いで「中学生体験入学」（138 校）、「地域との連携・交流活動」（137 校）、「学校案内」（109 校）が多かった。

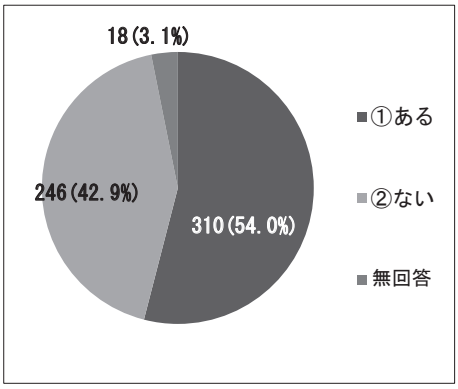
教　員　回答数　574 人

アンケート依頼校数　233 校（学科主任を含め、１校当たり年齢層の異なる教員３人に依頼）

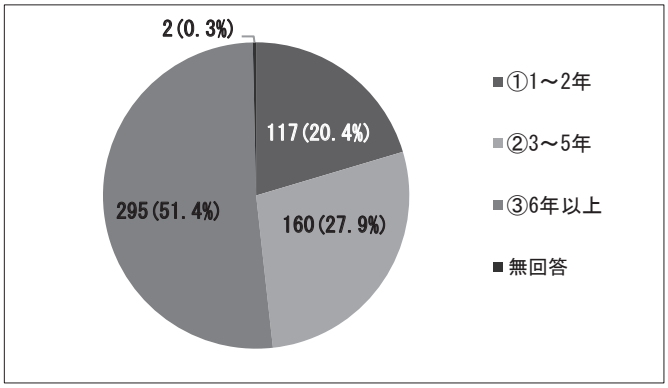
【年代】



【以前の家庭学科の経験】



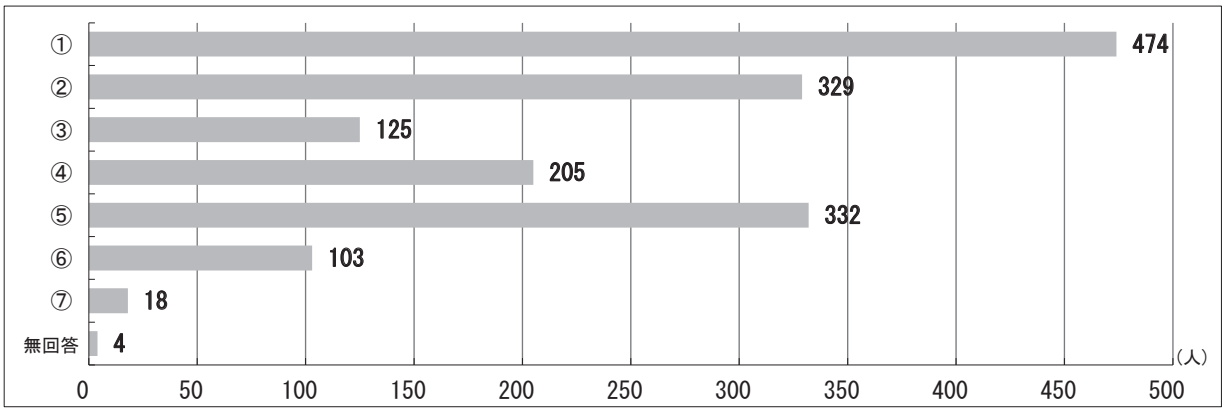
【勤続年数】



1　家庭に関する学科に関する教育活動について

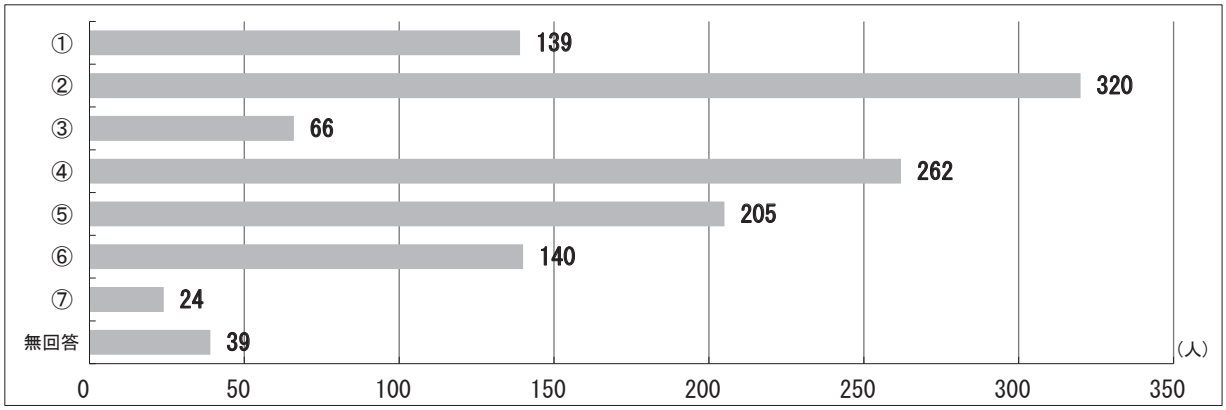
① 専門教科全般　　②技術検定等の資格取得　　③ 職業資格の取得（調理師免許等）
④ 学校家庭クラブ活動（地域連携・交流活動含む）　　⑤ 学科に関する行事
⑥ インターンシップ等進路に関する活動　　⑦ その他

（１）やりがいを感じる教育活動（複数回答可）



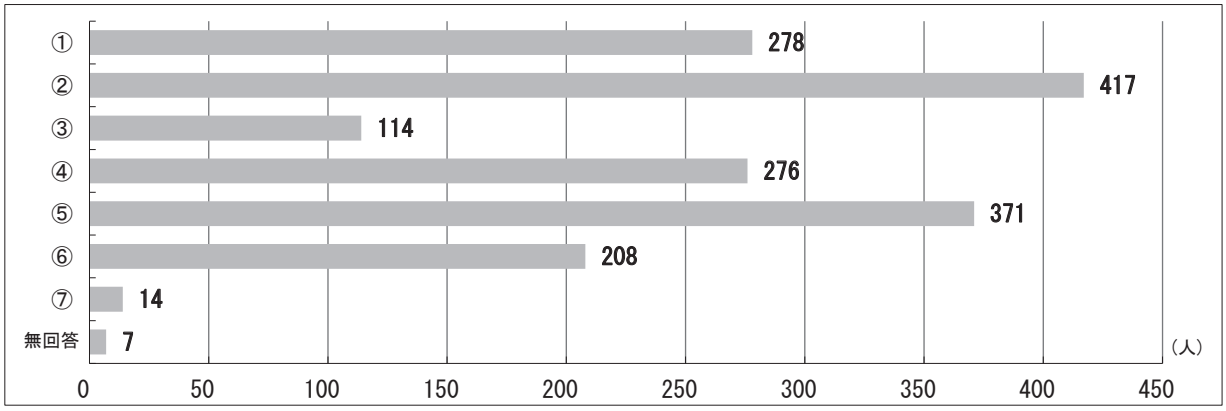
「専門教科全般」474 人（82.6%）、「学科に関する行事」332 人（57.8%）、「技術検定等の資格取得」329 人（57.3%）の順で高く、半数を超える教員がこれらの教育活動にやりがいを感じていた。

（２）不安や負担感を感じる教育活動　（複数回答可）



「技術検定等の資格取得」320 人（55.7%）、「学校家庭クラブ活動」262 人（45.6%）、「学科に関する行事」205 人（35.7%）の順で不安や負担を感じていた。

（３）生徒の成長を感じる教育活動　（複数回答可）



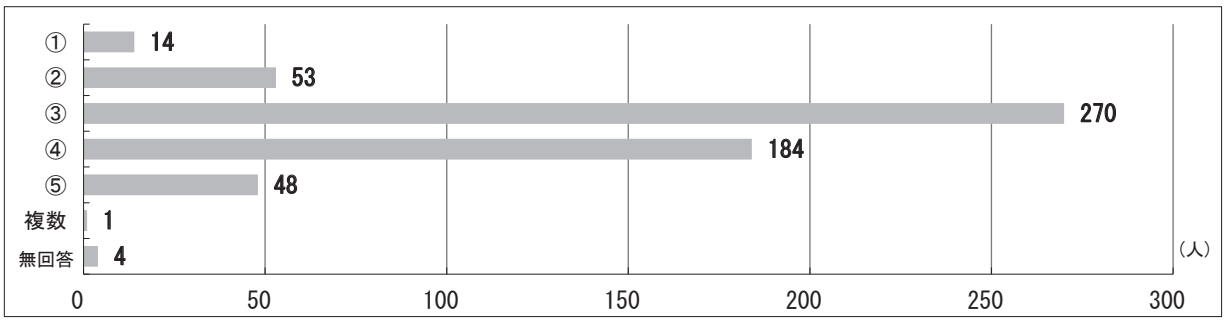
「技術検定等の資格取得」417 人（72.6%）、「学科に関する行事」371 人（64.6%）、「専門教科全般」278 人（48.4%）、「学校家庭クラブ活動」276 人（48.1%）の順で生徒の成長を感じていた。

以上のことから、「技術検定等の資格取得」は、最も生徒の成長を感じる教育活動であり、やりがいを感じる一方で、不安や負担感を感じる教育活動であることが明らかになった。また、専門教科全般の教育活動については、不安や負担感をあまり感じずに、やりがいや生徒の成長を感じていることが分かった。

2　勤務時間等について

（1）超過勤務時間について　（月平均超過時間とし、休日勤務時間を含む。ただし、長期休業中は除く。）

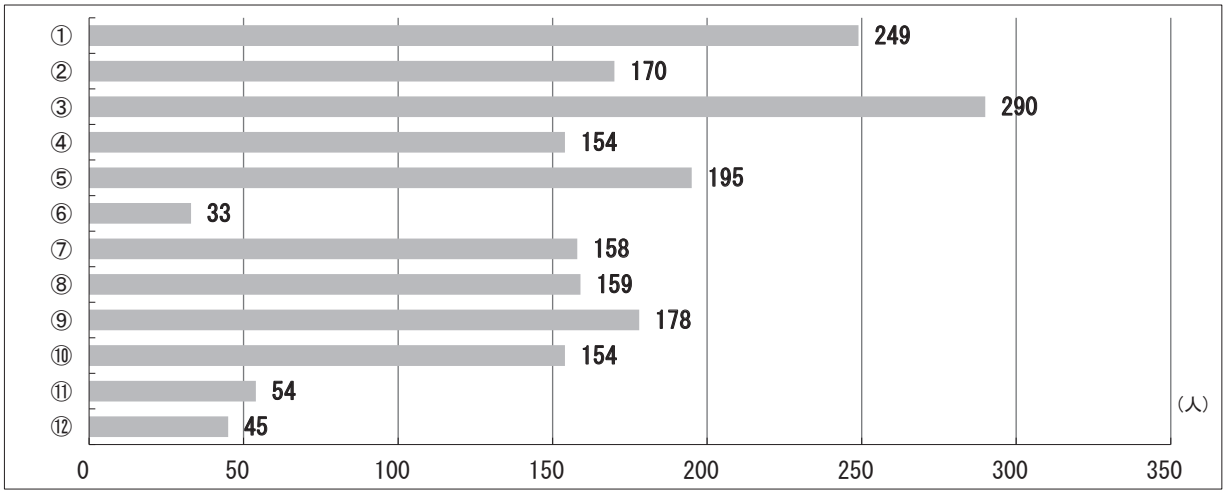
① ほぼ定時内で業務は遂行できている　② 10 時間未満　③10 時間以上 45 時間未満
④ 45時間以上80時間未満　⑤ 80時間以上



「45 時間未満」は 337 人（58.7%）であった。一方、「80 時間以上」は 48 人（8.4%）であった。

（2）超過勤務につながる業務について　（特に多いものを３つ）

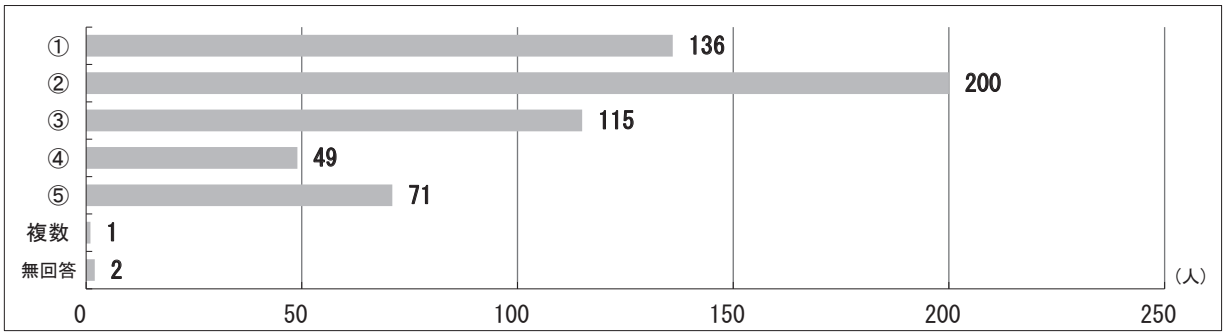
① 教材研究　② 実習準備・片付け　③ テストや作品の採点　④ 授業補習
⑤ 技術検定指導　⑥ 学校家庭クラブ活動の指導　⑦ 学科行事の指導　⑧ 担任業務
⑨ 担任以外の校務分掌の業務　⑩ 学科や校務分掌に関する会議やその資料作成
⑪ 都道府県の教育研究会や技術検定等の事務局に関する業務　⑫その他



「テストや作品の採点」290 人（50.5%）、「教材研究」249 人（43.4%）、「技術検定指導」195 人（34.0%）、「担任以外の校務分掌の業務」178 人（31.0%）、「実習準備・片付け」170 人（29.6%）であった。

（3）日常の自宅への持ち帰り業務について　（月平均）

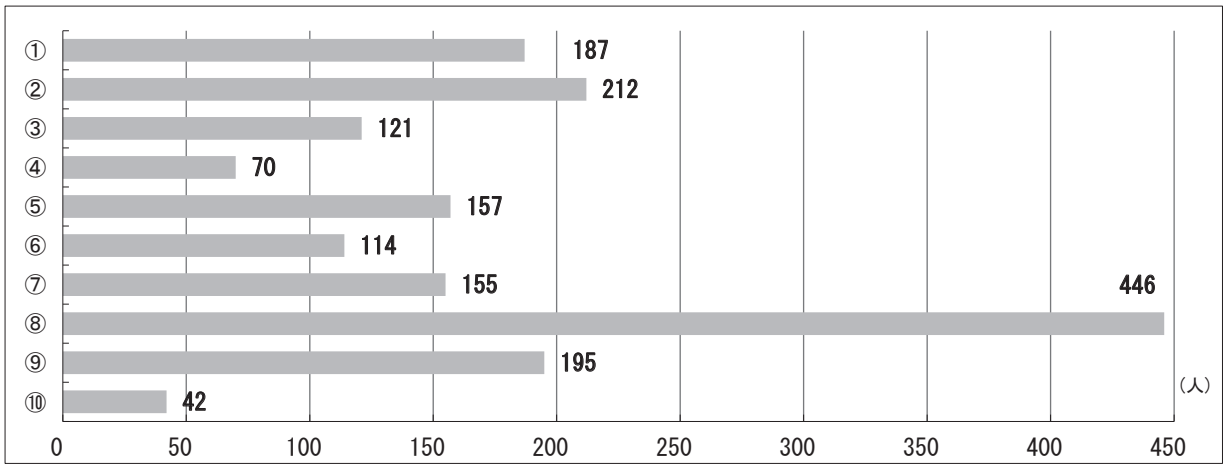
① ほとんどない　② １～５時間　③ ６～10 時間　④ 11～15 時間　⑤ 16 時間以上



「ほとんどない」は 136 人（23.7%）であった。「１～５時間」200 人（34.8%）、「６～10 時間」115 人（20.0%）など、持ち帰り業務を行っている者が 75.8%あった。

（4）業務負担軽減のために必要と感じること　（複数回答可）

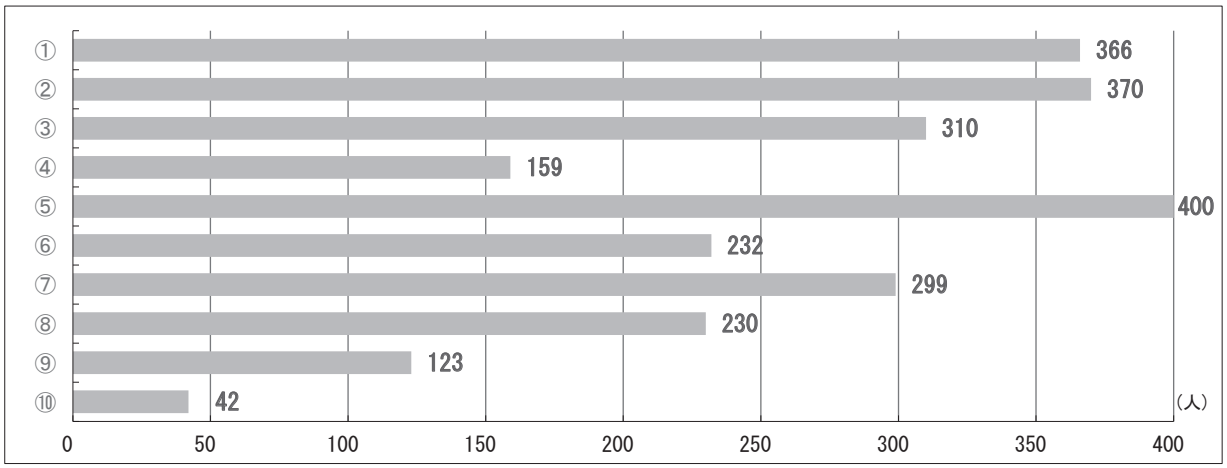
① 教科指導の工夫・改善　② 技術検定指導の工夫・改善　③ 地域連携・交流活動の精選
④ 学校家庭クラブ活動の工夫・改善　⑤ 学科行事の精選　⑥ ICT 機器の活用
⑦ 教員間の教材の共有　⑧ 教員増　⑨ 実習助手の配置　⑩ その他



「教員増」が 446 人（77.7%）で突出しており、次いで「技術検定指導の工夫・改善」212 人(36.9%)、「実習助手の配置」195 人（34.0%）であった。

3　家庭学科設置校における勤務について、日頃感じていること　（複数回答可）

① 生徒の３年間での知識・技術や人間性の成長が顕著でやりがいがある
② 教科に関する専門性が高く、自分の知識・技術の向上につながる
③ 生徒との関係性が深まり、喜びや感動が大きい
④ 教科指導や学科行事等を通して学校外での人間関係が広がり、自分の成長につながる
⑤ 家庭科教員が複数いることで、指導方法を学んだり相談することができ、心強い
⑥ 指導内容の専門性が高く、より専門性を深めなければ教えられないことが負担である
⑦ 担当科目数や担当生徒数が多く、教材研究や採点、評価など負担が大きい
⑧ 休日や放課後に検定などの実技指導や監督・審査の負担が大きい
⑨ 休日や放課後の学科行事指導や校外活動引率等の負担が大きい
⑩ その他

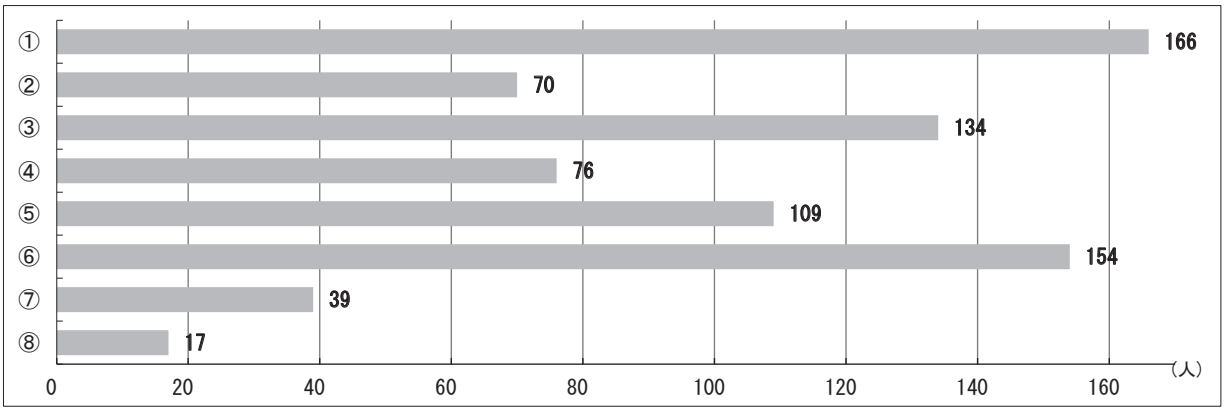


「家庭科教員が複数いることで心強い」400 人（69.7%）と最も多く、次いで「専門性が高く、知識・技術の向上につながる」370 人（64.5%)、「生徒の３年間の成長が顕著でやりがいがある」366 人（63.8%）であった。一方で「担当科目数が多いため採点・評価などの負担が大きい」299 人（52.1%）であった。選択肢にはポジティブなものとネガティブな内容があるが、複数の教員が存在することをメリットと感じている教員が多いなど、多くの教員が家庭学科設置校勤務についてポジティブな面で捉えていることは、特筆に値する。

【学科主任回答】　回答数　229 人　　家庭に関する学科の特色や魅力について

（１）特色や魅力につながっていると考えられる取組について　（複数回答可）

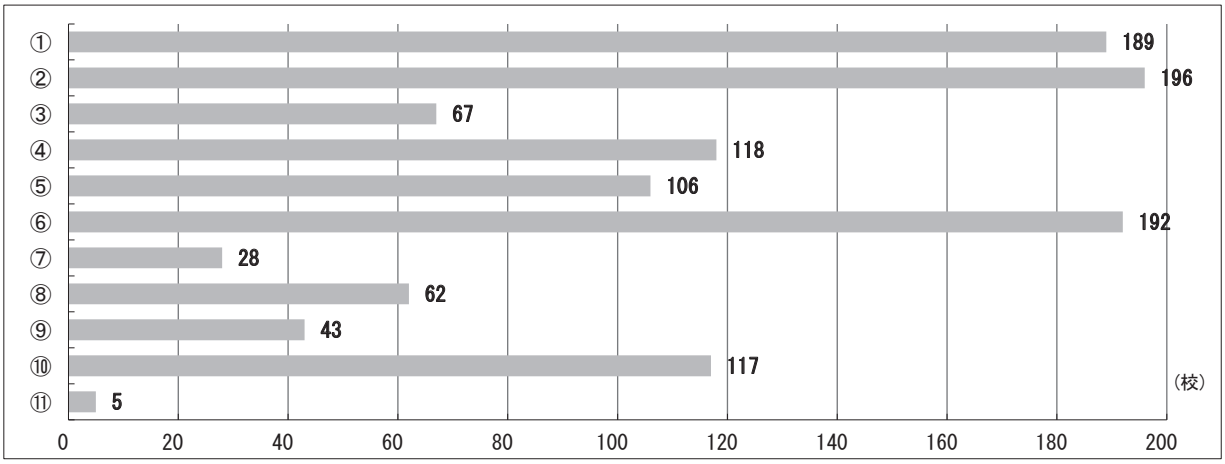
① 専門教科　② 学校設定科目　③ 技術検定等の資格取得　④ 職業資格の取得（調理師免許等）
⑤ 学校家庭クラブ活動や地域との連携活動・交流活動　⑥ 学科に関する行事
⑦ インターンシップ等進路に関する活動　⑧ その他



「専門教科」166 人（72.5％）、「学科に関する行事」154 人（67.2％）、「技術検定等の資格取得」134 人（58.5％）であった。

（２）学科の特色や魅力に関する情報の発信方法について　（複数回答可）

① 学校案内　② 学校ホームページ　③ 学校 SNS（学科 SNS）　④ マスコミ（新聞・報道）
⑤ 中学校訪問　⑥ 中学生体験入学　⑦ 公開授業　⑧ 学校祭一般公開
⑨ 学科関連行事への招待　⑩地域連携・交流活動　⑪ その他



「学校ホームページ」196 人（85.6％）、「中学生体験入学」192 人（83.8％）、「学校案内」189 人（82.5％）であった。

生　徒

アンケート依頼校数　233 校　　回答学科数　234 学科　8,010 人

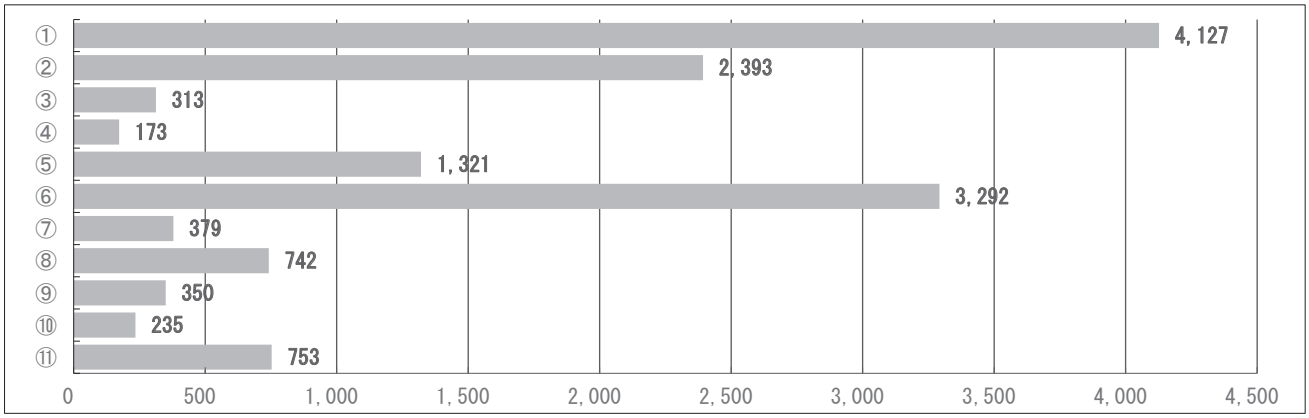
学科別回答数（回答人数）　①家政系　129（4,555 人）　②被服系　24（640 人）
③食物系(調理師養成課程除く）11（397 人）
④食物系(調理師養成課程）54（1,877 人）
⑤保育系　7（254 人）　⑥その他　9（287 人）

1　高校進学に際して、志望校や志望学科を決める時に参考とした情報や活動等　（複数回答可）

①高校の学校案内　②高校のホームページ　③高校の SNS(学科 SNS)　④マスコミ(新聞等のマスメディア)
⑤高校の校長や先生による中学校での学校紹介　⑥高校における学校説明会や体験授業　⑦高校における公開授業
⑧高校の学校祭等の一般公開　⑨高校の招待行事への参加　⑩高校生が活躍する地域での活動や交流活動
⑪その他

＜全　体＞

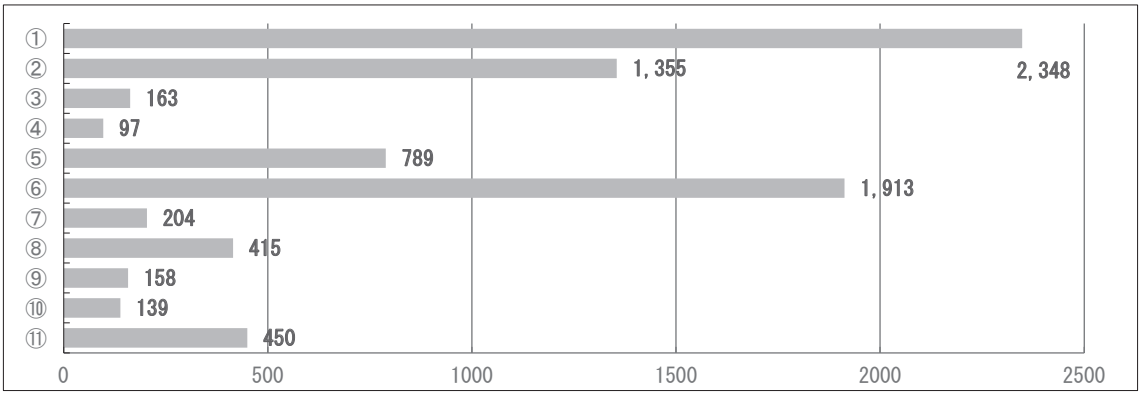
（人）



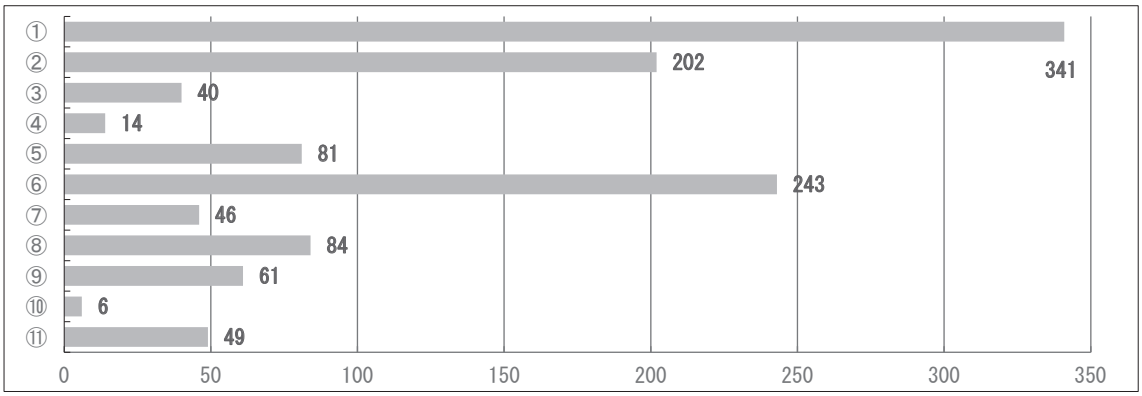
＜学科別＞

（人）

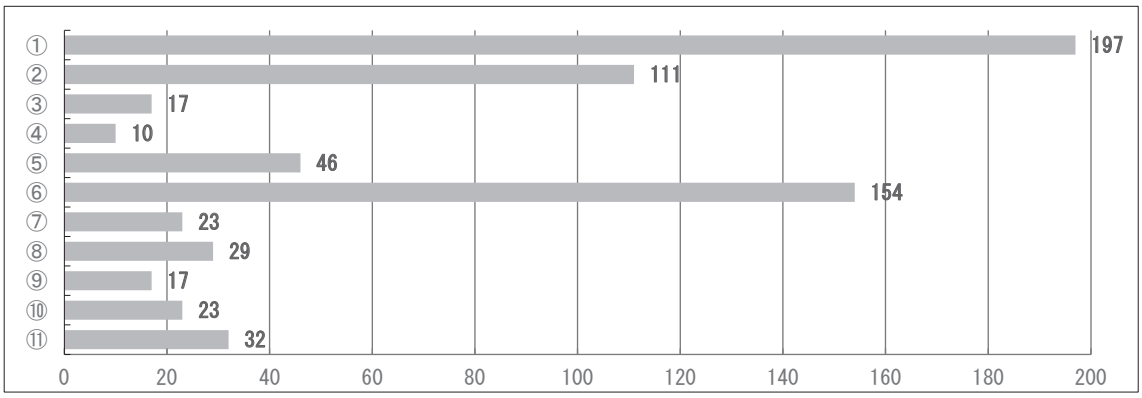
①家政系



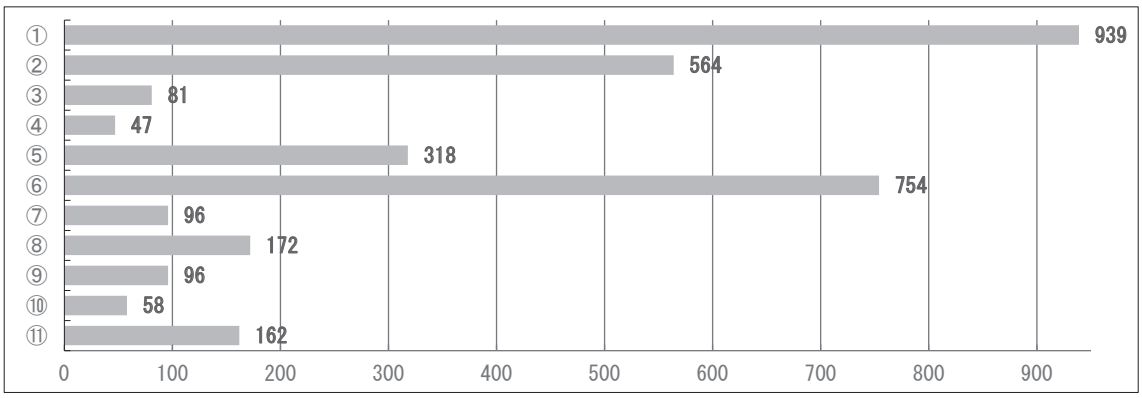
②被服系



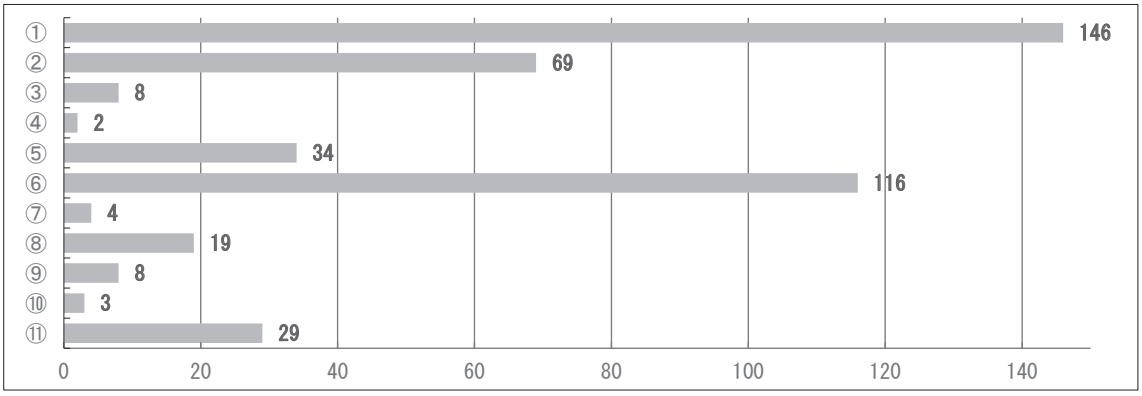
③食物系
（調理師養成課程除く）



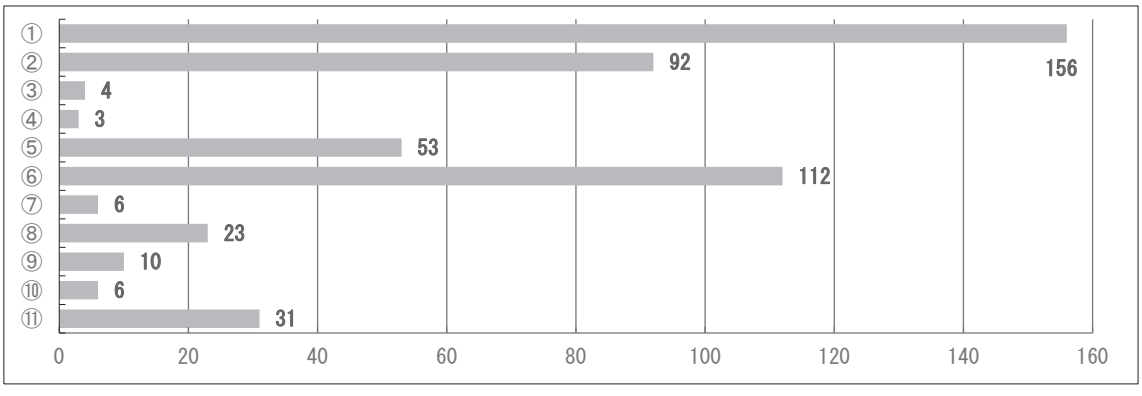
④食物系
（調理師養成課程）



⑤保育系



⑥その他



全体では「学校案内」が 4,127 人（51.5%）と最も多い。次いで「高校における学校説明会や体験授業」3,292 人（41.1%）、「高校のホームページ」2,393 人（29.9%）であった。

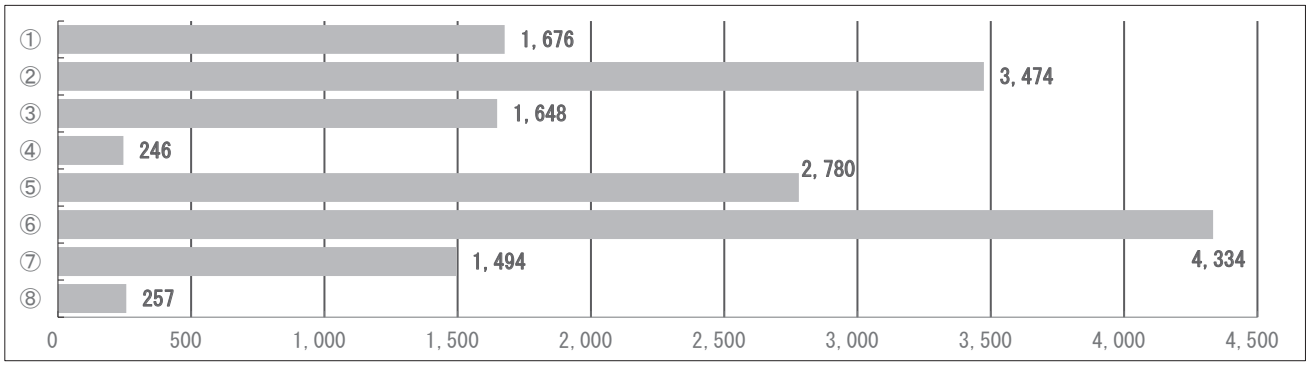
学科別の大きな差異はなかった。

2　現在の家庭に関する学科を志望した理由　（複数回答可）

①家庭科が得意　②家庭に関する学科の学習内容に魅力を感じた　③家庭に関する学科の行事に魅力を感じた
④学校家庭クラブ活動や地域交流活動に魅力を感じた　⑤学科の学びの成果を進学や就職に生かせる
⑥資格が取得できる　⑦親や中学校の先生に勧められた　⑧その他

＜全　体＞

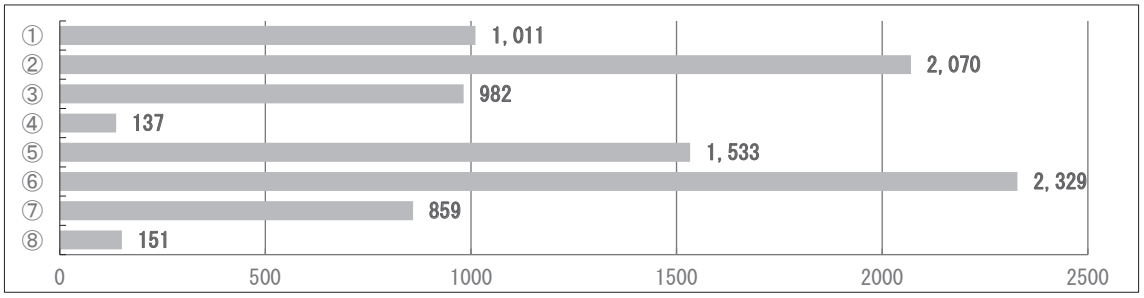
（人）



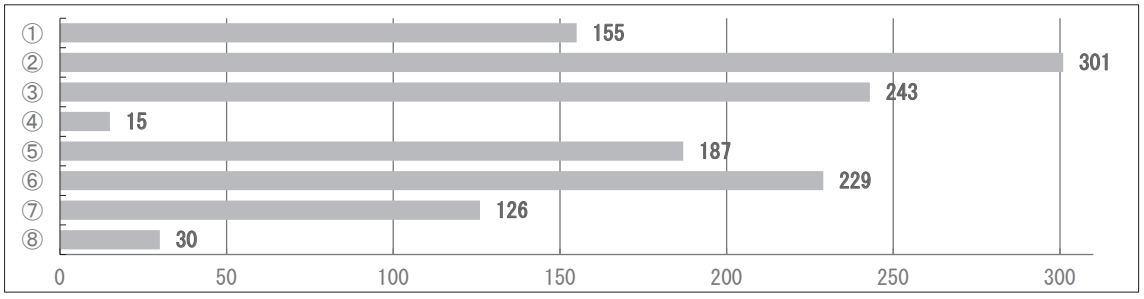
＜学科別＞

（人）

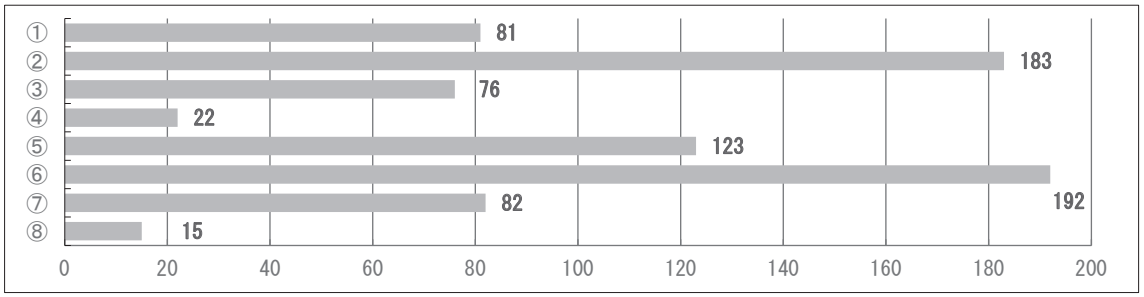
①家政系



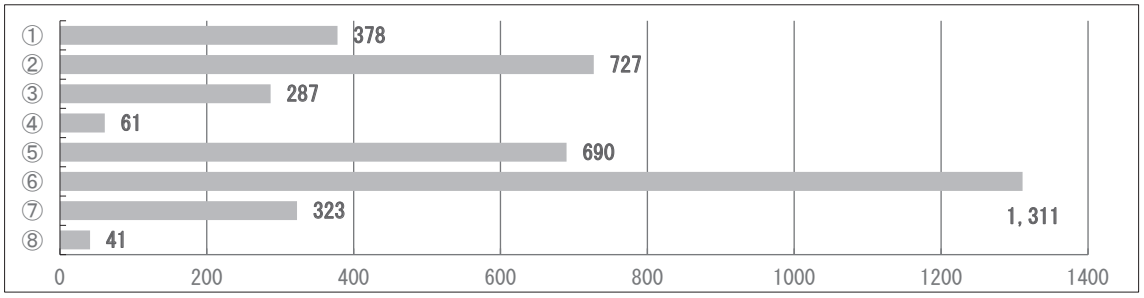
②被服系



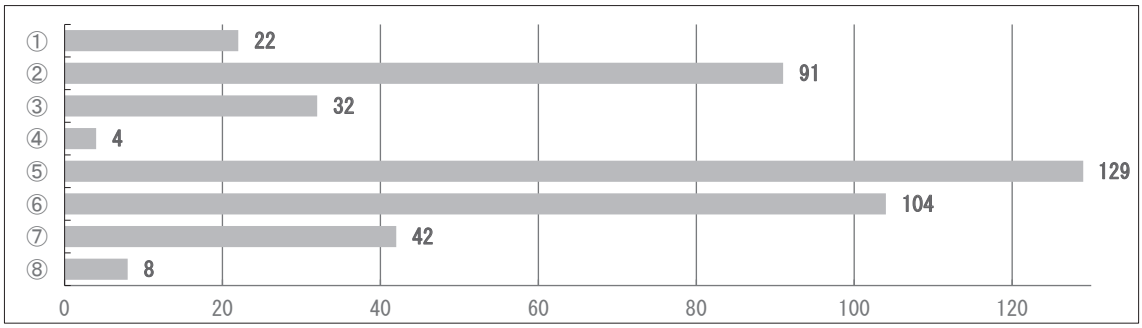
③食物系
（調理師養成課程除く）



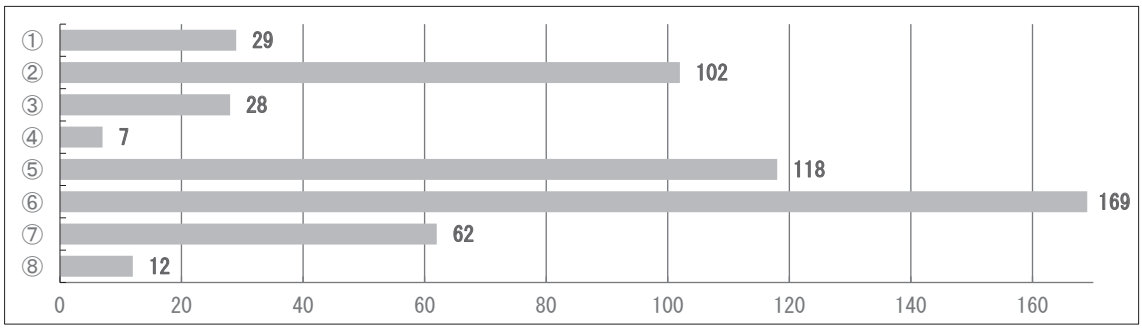
④食物系
（調理師養成課程）



⑤保育系



⑥その他



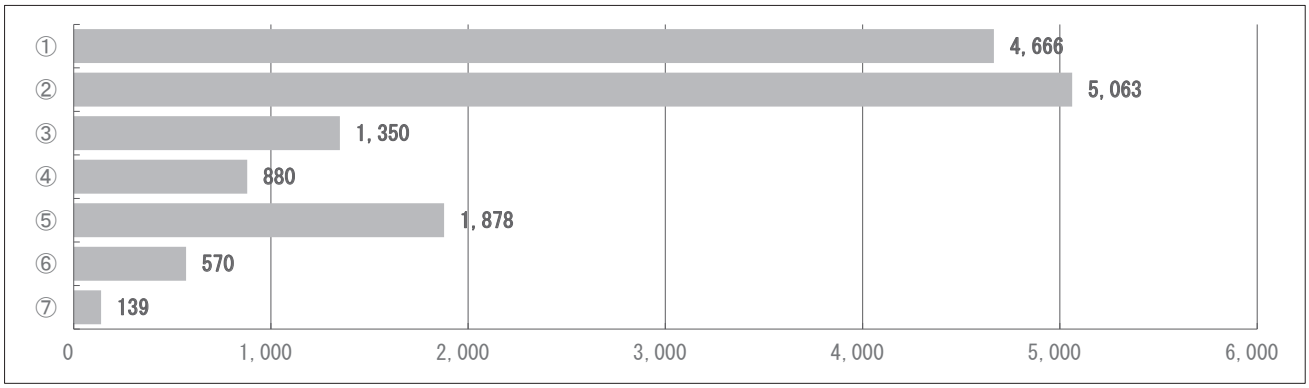
全体では順に「資格が取得できる」4,334 人（54.1%）、「家庭に関する学科の学習内容に魅力を感じた」3,474 人（43.4%）、「学科の学びの成果を進学や就職に生かせる」2,780 人（34.7%）であった。

学科で特徴がみられるのは、被服系では「家庭に関する学科の行事に魅力を感じた」301 人（47.0%）、保育系では「学科の学びの成果を進学や就職に生かせる」129 人（50.8%）であった。

3　家庭に関する学科の３年間の学びで、自らの成長を感じたもの　（複数回答可）

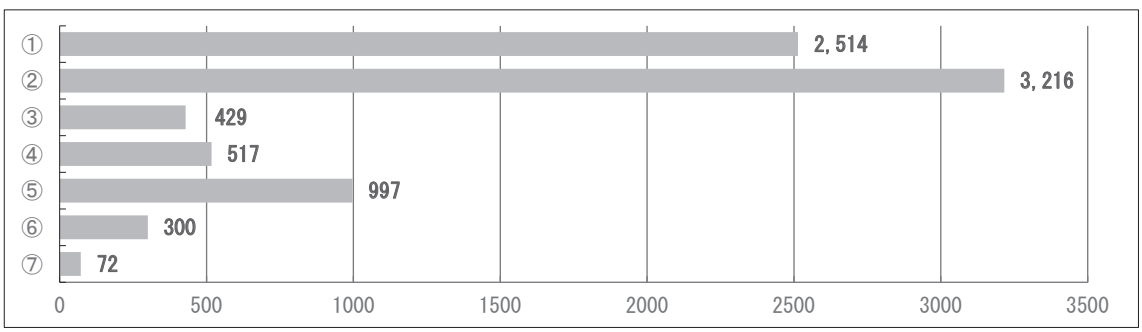
①専門教科全般　②技術検定等の資格取得　③職業資格の取得（調理師免許等）
④学校家庭クラブ活動や地域との連携活動・交流活動　⑤学科に関する行事
⑥インターンシップ等進路に関する活動　⑦その他

＜全　体＞　（人）

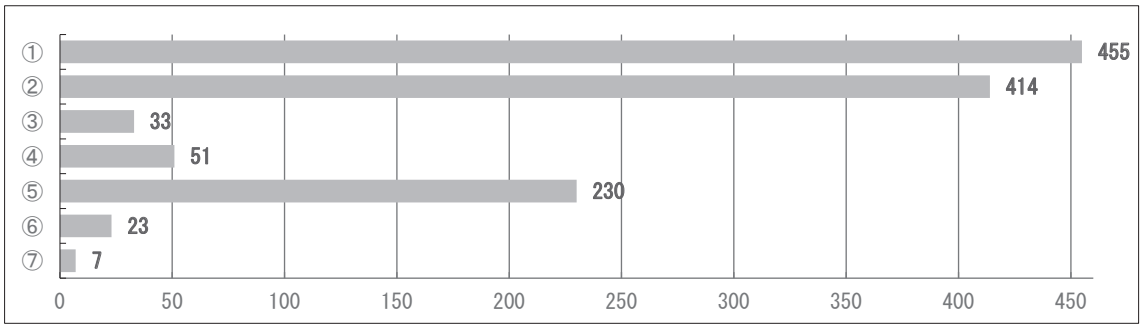


＜学科別＞　（人）

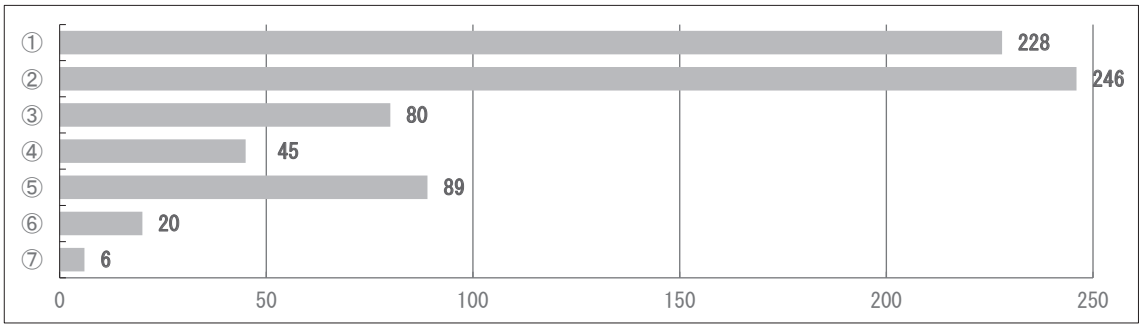
①家政系



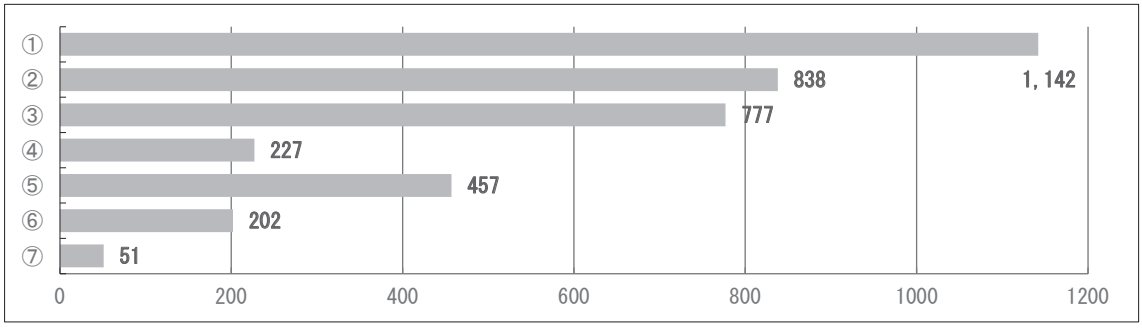
②被服系



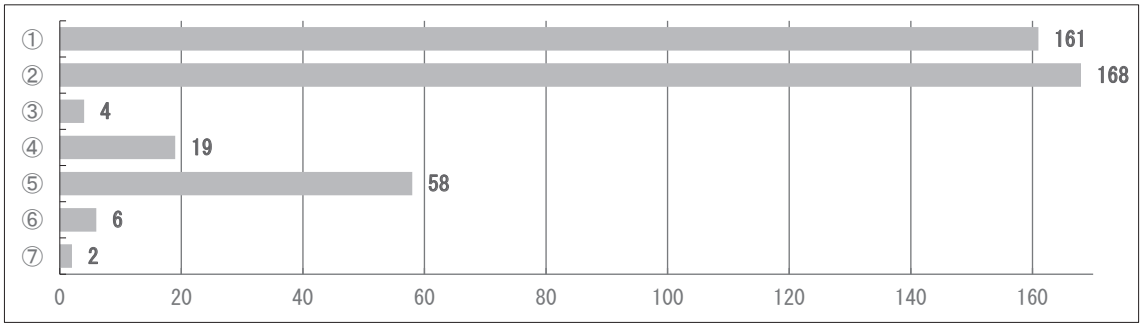
③食物系
(調理師養成課程除く)



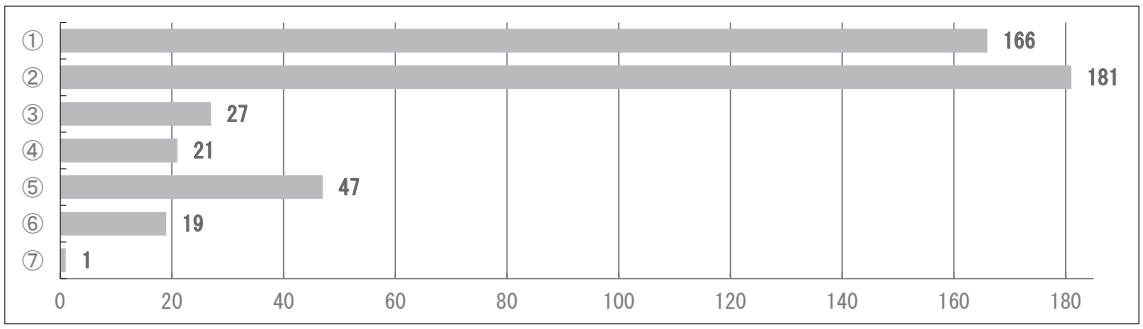
④食物系
(調理師養成課程)



⑤保育系



⑥その他



全体では順に、「技術検定等の資格取得」5,063人（63.2%）、「専門教科全般」4,666人(58.3%)、「学科に関する行事」1,878人（23.4%）であった。対象生徒は、コロナ渦で入学から卒業を迎えているので、「学科に関する行事」は中止又は規模の縮小や制限下で実施されたため、教員の回答とは大きく異なったと考えられる。

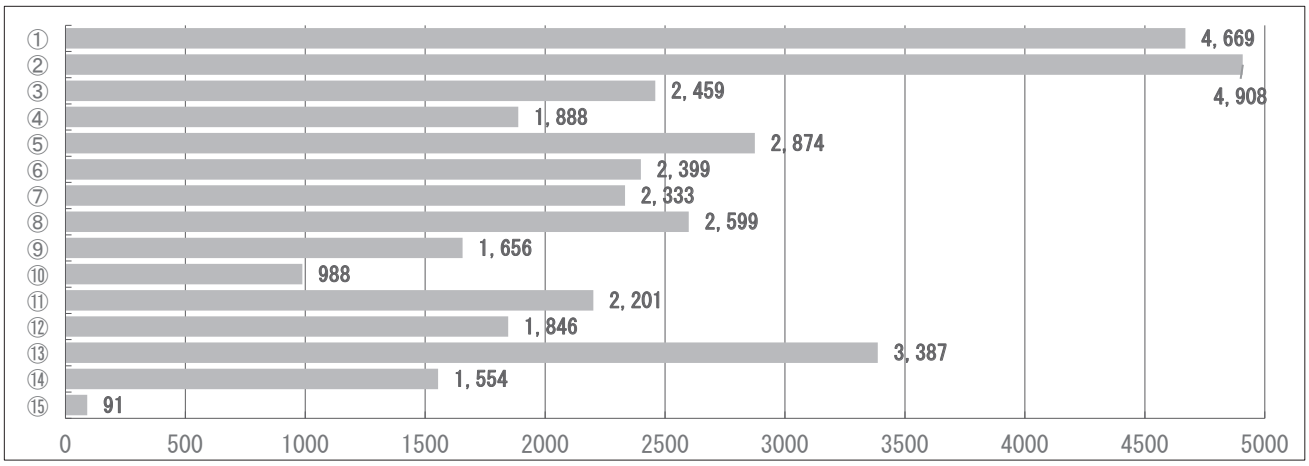
学科別の大きな差異はなかった。

4　現在の家庭に関する学科で学んでよかったと感じること　（複数回答可）

①専門性が高く、高度な知識や技術が身に付いた　②資格を取得することができた
③学習内容に興味・関心が一層深まった　④集中力や忍耐力が高まった
⑤マナーや身だしなみ、衛生観念などが身に付いた　⑥作業をする時の順序や時間配分など、段取り力が身に付いた
⑦「努力してやればできる」と経験を重ね、自己肯定感が高まった　⑧協調性や仲間との連帯感が高まった
⑨積極性が高まった　⑩異年齢や多様な職業の人と接するなど、対人関係力が高まった
⑪将来の目標や就きたい仕事が見つかった　⑫学科での学びが進路実現に直接つながった
⑬家で調理するなど、学校で学んだことを生活に生かせる
⑭発表の場など様々な行事があり、楽しいことが多かった　⑮その他

＜全　体＞

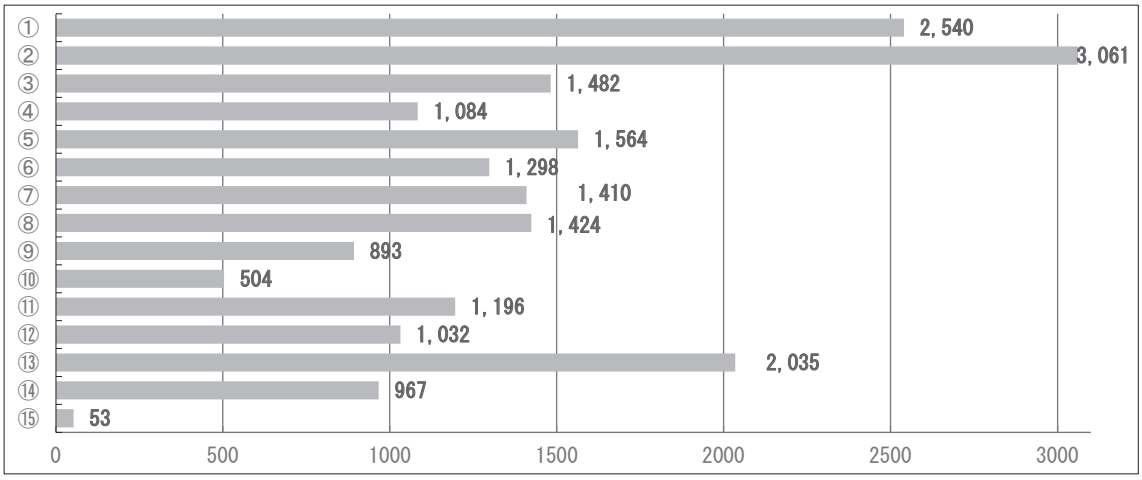
（人）



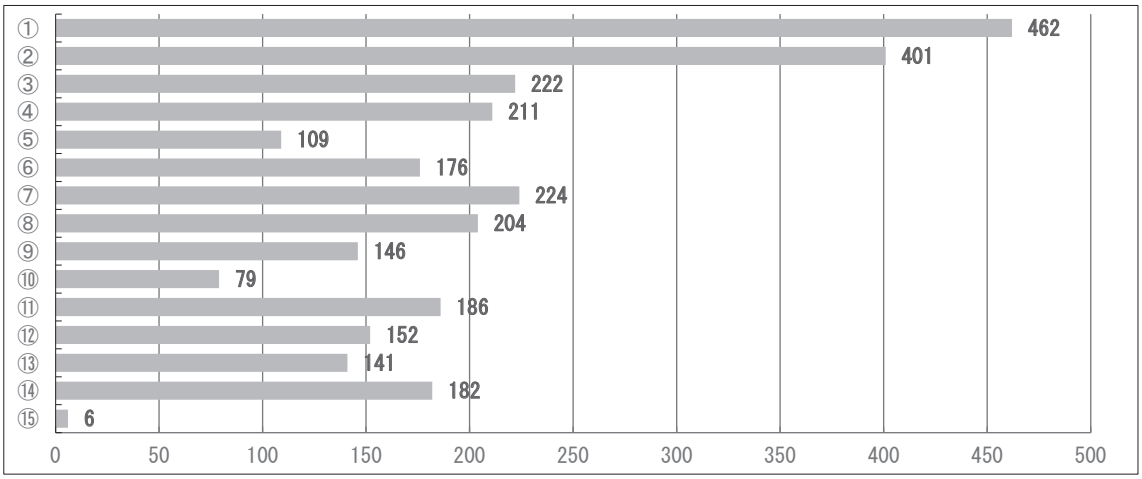
＜学科別＞

（人）

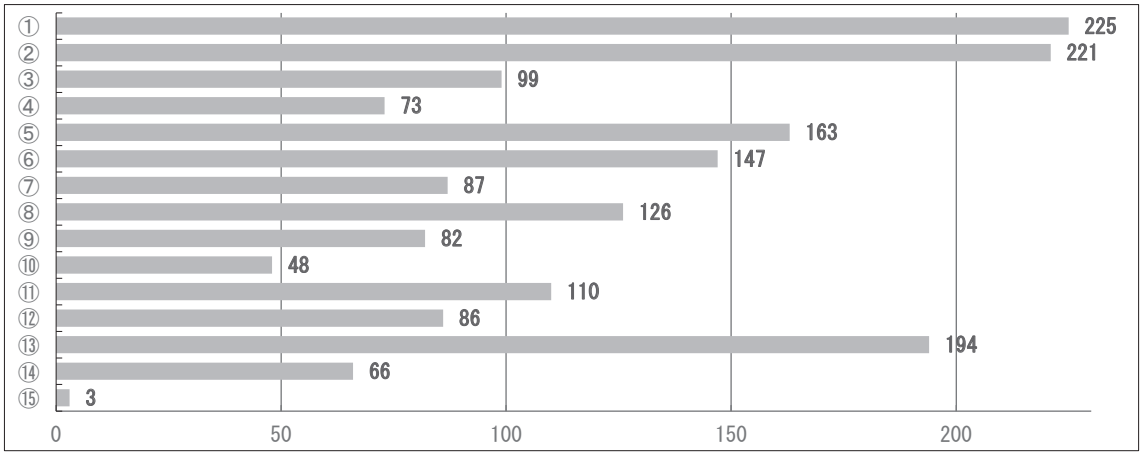
①家政系



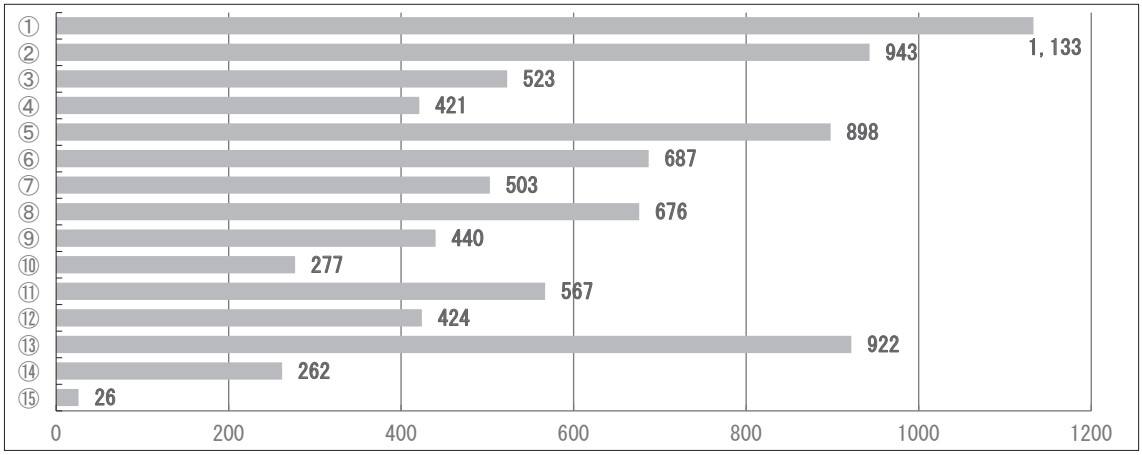
②被服系



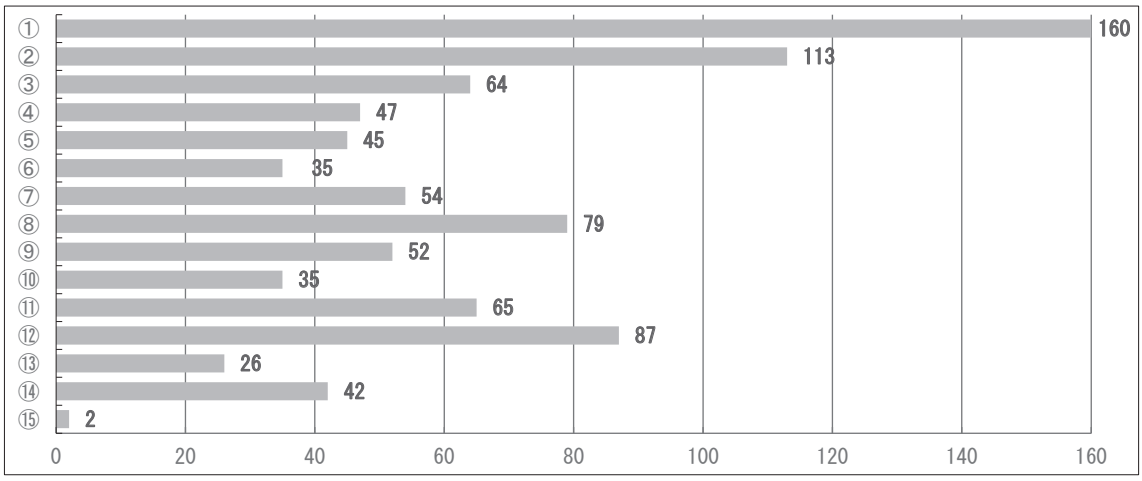
③食物系
（調理師養成課程除く）



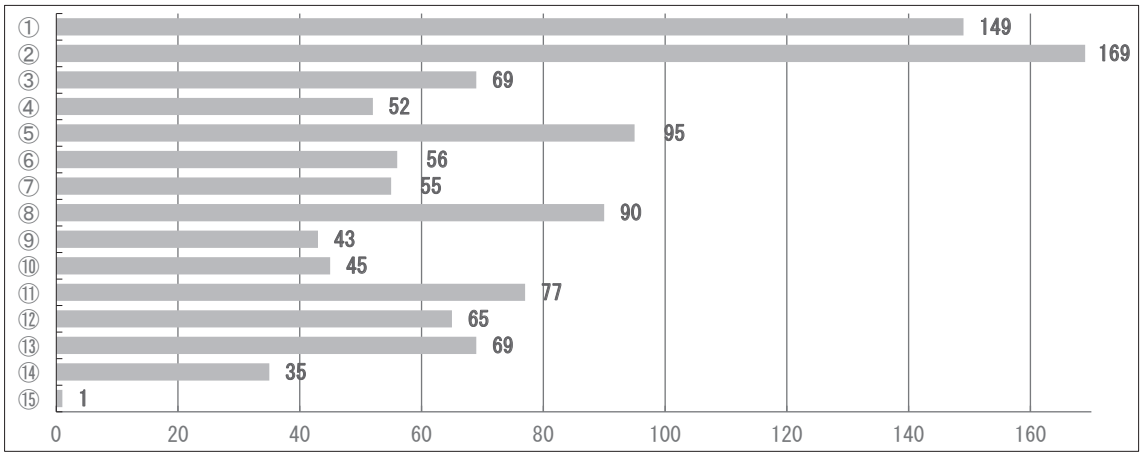
④食物系
（調理師養成課程）



⑤保育系



⑥その他



全体では順に、「資格を取得することができた」4,908 人（61.3%）、「専門性が高く、高度な知識や技術が身に付いた」4,669 人（58.3%）、「家で調理するなど、学んだことを生活に生かせる」3,387 人（42.3%）であった。学科別にみると、被服系、食物系、保育系では「専門性が高く、高度な知識や技能が身に付いた」が最も多かった。

５　中学生へのＰＲ（抜粋）

【 家政系 】

・将来の夢の可能性を高められる専門的な授業が受けられます。また、進学、就職の幅が広く、卒業後の目標に向かって自由に選択することができます。
・専門性のある学科で、実習が多くとても楽しいです。仲間との協調性も身に付き、向上心を高めることができます。
・資格取得をめざして努力をすることで、諦めない気持ちが身に付きました。
・普通高校に通っていたら絶対に経験できないことがたくさんあり、その分、大変で努力も必要ですが、確実に自分の人生経験や技術力はアップします。
・将来に生かすことができる技術や知識を身に付けるだけでなく、資格取得や実習を通して自分の心までも成長することができる学科です。
・授業や検定受検することで、技術が身に付くだけでなく集中力や忍耐力を高めることもでき、人としても成長することができます。
・専門知識だけなく、相手の気持ちを考えながら、丁寧に生活することで、とても優しい心が身に付きます。
・基本的なことから始まり専門的内容を学ぶことができ、家庭内だけでなく、地域でも役立つような学習をすることができ、楽しいです。
・大変なことも多かったけれど、達成感がその分多く、頑張って良かったと思いました。
・検定などが多く、緊張する場面もあるけれど、仲間同士で教え合ったり励まし合ったりするので、仲を深めることができます。また、練習した分だけ自分の力になり、自信につながります。行事もたくさんあるし、社会人になっても役立つことも多いし、楽しい３年間が過ごせます。
・自分の得意、不得意を見つけることができ、自分も気付いていない自分を見つけることができ、様々なことがたくさん学べる学科です。
・自分や自分の周りの人の生活をより豊かにすることができます。
・“やった”“できた”“楽しい”が実感できる学科です。
・地域との交流や発表、イベント事が多く、達成感や人との関りでコミュニケーション能力がとても付きます。
・専門的な知識、技術が学べます。自分の得意なことに気付けたり、将来への可能性が広がる授業がたくさんあります。
・苦手なことでも練習すればできるということを知れ、充実した３年間を過ごすことができました。
・マナーや積極性を身に付けることができ、社会に出た時に必ず役に立ちます。また、学科の皆さんで行事を成功させる楽しみがあったり、検定に挑戦し、高め合ったりする中で、仲間との協力を深く学べる場です。
・自分能力を最大限に、また、それ以上に引き出すことのできる学科です。自分の成長をより感じたい方は、ぜひ、お待ちしています。
・将来の夢がはっきり決まっている人も、まだ何をしたいか見つかっていない人も、興味が広がる体験がたくさんできるので、夢を見つけることができます。
・普通高校では経験できない体験が多くでき、家庭科で身につけた実践力はどの分野に進んでも強みになると思います。
・学んだ事を発表できる場が多く、楽しくやりがいがあります。
・自ら積極的に行動することが多い学科なので、積極性が高まります。

【 被服系 】

・ファッションショーなど他ではできない経験ができ、達成感を味わえます。また、仲間と一緒に成長でき、視野も広がり宝物がいっぱいです。
・３年間あったら人は変われると思いました。入る前はこんなポジティブで頼りになるような性格ではなかったです。
・自分に自信をつけることができる学科です。挑戦することが好きになります。
・頑張れば頑張った分、技術も自信もつきます。
・努力と結果が比例しているのが、目に見えて実感できて良いです。
・創造力が広がり、コツコツと続けることで、自分が思っているよりもできるようになることが増えます。頑張った分だけ成長できる学科です。
・ファッションショーの衣装作りでは、自分がイメージしたものを作れる技術が身に付きます。

【 食物系調理師養成課程 】

・調理の知識や技術が身に付き、時間の使い方が上手なります。また、特別実習やホテル実習、小学校給食実習などめったに出来ない体験が多いです。
・たくさんの専門科目を学ぶことができ、とても充実した３年間を過ごすことができるのと同時に、３年間一緒のクラスメイトと励み、楽しい高校生活が送れるのでぜひ、調理科へ。
・プレゼンテーション能力や企画力、自分の長所を伸ばしたり、発見できる場所です。
・普段の授業で調理技術が向上し、カフェ運営などの経験でさらに調理について学び、接客なども身に付き、コミュニケーション能力が向上します。
・色々なジャンルの料理が学べ、自分のやりたいことを見つけるチャンスにもなったり、夢が決まっている人でも楽しめる授業が多くあります。
・プロの方から実習を教われるため、将来、食に関わる仕事をしたいと思っている人は、ぜひ入学してください。

【 保育系 】

・ピアノが弾けるようになったり、作業する時の段取りがよくなります。
・園での実習もあり、子供の笑顔が天使で可愛いです。
・実習があるので大学に行った時に周りよりも保育のことに関して知識があり、さらに深めることが出来ると思います。例え自分が保育士にならなくても、生活に役立つことが学べるのでいいと思います。
・専門性が高く、早くから保育について詳しく学べたり実習などの経験もできるので、保育関係の仕事を目指している方にとてもおすすめです。また、やりがいを感じられます。

Ⅳ　まとめと提言

家庭に関する学科（以下、「家庭学科」という）では、従前から学科の特色を生かした多岐にわたる魅力ある教育活動を行っており、生徒は高校３年間の教育活動を通して大きく成長していると考えてきた。一方、家庭科教員は高い専門性が求められると同時に、業務への負担が少ないとはいえず、「働き方改革」が求められる中で、「働き方」が課題と考えられる。そこで、「家庭に関する学科の魅力ある取組の可視化 ～働き方改革との両立を目指して～」をテーマに、アンケート調査を通して、その実態と課題を把握し、家庭に関する学科の魅力を可視化して、その振興に資するとともに、「働き方改革」の一助となることをねらいに、２年間にわたって調査研究に取り組んできた。

アンケート調査の結果、次のことが分かった。

■家庭学科の魅力については、「高校３年生」「家庭科教員」ともに「技術検定等の資格取得」「専門教科全般（家庭に関する学習内容）」「家庭学科に関する行事」が挙げられ、明らかになった。多くの校長は、「地域や外部機関との連携」によって、魅力・特色づくりを進めたいと考えていた。生徒募集に繋げるためには、生徒が高校生活に求めるものを理解して魅力･特色づくりを進めるとともに、より効果的に情報発信することが重要である。

■情報発信の方法については、校長、学科主任ともに「学校のホームページ」が最も多く、「中学生体験入学」や「学校案内」よりも多かった。一方、生徒は、志望校や志望学科を決める時に参考としたものは、「学校案内」が最も多く、次いで、「学校説明会・体験授業」、「学校のホームページ」であった。生徒募集を効果的に進めるためには、ICT 化が急速に進む中ではあるが、「学校案内」パンフレットの充実も重要と考えられる。

■働き方改革については、超過勤務時間が月平均 45 時間以上の教員が約４割、持ち帰り業務を行っている者も８割近くいたことから、多忙化解消が大きな課題である。

(1) 家庭科教員の確保・増加

業務負担軽減のために必要と感じることで最も多かったのが、「教員増」であった。しかし、家庭科教員定数に対して欠員のある学校が約 15%もあり、この課題解決が急務である。欠員の理由には、「家庭科教員が家庭学科設置校での勤務を希望しない」ことが大きな要因といわれている。ところが、教員の「家庭学科設置校勤務について、日頃感じていること」では、上から順に、「家庭科教員が複数いることで、指導方法を学んだり相談したりすることができ、心強い」「教科に関する専門性が高く、自分の知識・技術の向上につながる」「生徒の３年間での知識・技術や人間性の成長が顕著でやりがいがある」であり、家庭学科設置校勤務についてポジティブに捉えており、「負担感」ばかりが取り沙汰されがちな中で、特筆したい。

(2) 家庭科実習助手の配置

家庭科実習助手のいない学校が４割強もあった。超過勤務につながる業務として、「テストや作品の採点」「教材研究」が突出して多いが、「実習準備・片付け」を挙げている教員が約３割おり、家庭科実習助手の配置が多忙化解消のために必要と考えられる。

(3) 技術検定指導の工夫・改善

「技術検定等の資格取得」は、生徒の「家庭に関する学科を志望した理由」でも「３年間の学びで自らの成長を感じたもの」でも、最も多かった。また、教員にとっても、「生徒の成長を感じる教育活動」で最も多かった。その一方で、その指導や実施に不安や負担感を感じる教員が半数を超え、超過勤務につながる業務としても３割強の教員が挙げていることから、技術検定指導の工夫・改善が必要と考えられる。

【提言】

1　技術検定等の資格取得、専門的な知識・技術が身に付く学習内容、学科に関する行事などを中心とする家庭学科の魅力・特色に繋がる教育活動について、「学校案内」等の刷新・充実を行い、効果的に情報発信する。また、更なる魅力化・特色化に向けて、実践事例を参考にしていただきたい。

2　現状の定数に対する家庭科教員の確保を都道府県教育委員会に要望するとともに、家庭科教員免許の発行について関係大学に要望する。また、家庭科教員の定数増を国や都道府県に要望する。

3　家庭科実習助手が配置されていない学校においては、現在配置されている実習助手の業務を家庭科実習準備等により多く配分する。また、安全な教育活動への対応としても、家庭に関する学科への実習助手の配置を国や都道府県に要望する。

4　技術検定指導については、周年事業の一環として令和５年４月に全会員校に無償配付された家庭科技術検定 DVD の教員及び生徒への活用を促すなどして、負担軽減を図る。また、公益財団法人家庭科教育振興会で進めている技術検定の Web 申込をはじめとしたシステム化について、教員の負担軽減への配慮を要望する。

［資料１－１］

４家第76号
令和４年12月７日

家庭に関する学科設置高等学校長　各位

全国高等学校長協会家庭部会
理事長　木次　愼一
（公印省略）
専門教育に関する調査研究委員会
委員長　若松　明子

令和４年度 専門教育に関する調査について（依頼）

初冬の候、貴職におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。平素から、当部会の諸事業にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、専門教育に関する調査研究委員会では今年度から２年間、下記のテーマ及びねらいに基づいて調査研究を行います。その一環として、アンケートを実施させていただくことになりました。

つきましてはご多用のところ誠に恐縮ですが、趣旨をご理解のうえ、アンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。

また、同封しました下記５（１）の②～⑥（ホチキス留め）を家庭に関する学科主任にお渡しください。

記

１　テーマ
「家庭に関する学科の魅力ある取組の可視化　～働き方改革との両立を目指して～」

２　調査研究のねらい
家庭に関する学科では、学科の特色を生かした多岐にわたる魅力ある教育活動を行っており、生徒は高校３年間の教育活動を通して大きく成長している。一方、家庭科教員は高い専門性が求められると同時に、業務への負担が少ないとはいえず、「働き方改革」が求められる中で課題と考えられる。
そこで、アンケート調査を通して、その教育活動の成果と課題を把握し、家庭に関する学科の魅力を可視化して、その振興に資するとともに、「働き方改革」の一助となることをねらいとする。

３　アンケート調査の対象
家庭に関する学科設置校の校長、家庭科教員（学科ごとに学科主任 他２名）、
家庭に関する学科の生徒（高校３年生全員）

４　回答の方法及び期限
専校長用をＦＡＸで、令和５年１月18日（水）までにお送りください。（鑑不要）、

５　その他
（１）添付文書

①校長用質問用紙・回答用紙　専校長用、都道府県番号一覧	１部２葉
②学科主任宛文書「令和４年度 専門教育に関する調査について（依頼）」	１部１葉
③家庭科教員用　専教員用　≪質問用紙≫≪回答用紙≫	１部各１葉
④生徒用質問用紙・回答用紙　高３生徒用	１部１葉
⑤≪生徒用集計用紙≫　専生徒集計	１部１葉
⑥都道府県番号一覧	１部１葉

（２）家庭に関する学科が複数ある場合は、②～⑤は学科数コピーして学科ごとに回答をご依頼ください。
（３）回答内容については、本調査研究以外には利用いたしません。

＜問い合わせ先＞
全国高等学校長協会家庭部会
事務局長　加藤 路子
電　話　０３－３２６１－０６１７
ＦＡＸ　０３－３２８８－１６７０
ｅメール　all-kocho@katei-ed.or.jp

［資料１－２］

４家第76号
令和４年12月７日

家庭に関する学科設置高等学校
学科主任　各位

全国高等学校長協会家庭部会
理事長　木次　愼一
（公印省略）
専門教育に関する調査研究委員会
委員長　若松　明子

令和４年度 専門教育に関する調査について（依頼）

初冬の候、貴職におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。平素から、当部会の諸事業にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、専門教育に関する調査研究委員会では今年度から２年間、下記のテーマ及びねらいに基づいて調査研究を行います。その一環として、アンケートを実施させていただくことになりました。

つきましてはご多用のところ誠に恐縮ですが、趣旨をご理解のうえ、アンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。

記

１　テーマ
「家庭に関する学科の魅力ある取組の可視化　～働き方改革との両立を目指して～」

２　調査研究のねらい
家庭に関する学科では、学科の特色を生かした多岐にわたる魅力ある教育活動を行っており、生徒は高校３年間の教育活動を通して大きく成長している。一方、家庭科教員は高い専門性が求められると同時に、業務への負担が少ないとはいえず、「働き方改革」が求められる中で課題と考えられる。
そこで、アンケート調査を通して、その教育活動の成果と課題を把握し、家庭に関する学科の魅力を可視化して、その振興に資するとともに、「働き方改革」の一助となることをねらいとする。

３　アンケート調査の対象
家庭に関する学科設置校の校長並びに家庭科教員（学科ごとに学科主任 他２名）、
家庭に関する学科の生徒（高校３年生全員）

４　調査・回答の方法及び期限
（１）本文書と共に５（１）の①文書を２部コピーして、貴学科内の年齢層の異なる２名の先生にご依頼ください。
（２）専教員用 ≪質問用紙≫により≪回答用紙≫に回答し、各自、ＦＡＸでお送りください。（鑑不要）
※個人のご意見を伺うものですので、学科でまとめる必要はありません。
（３）高３生徒用 アンケート用紙により３年生に調査を実施し、学科ごとに≪集計用紙≫に集計してＦＡＸでお送りください。調査は、アンケート用紙を印刷するか、日頃使用しているアプリケーションを使用して実施してください。なお、電子データが必要な場合は、下のアドレス宛、その旨ご連絡ください。
（４）回答期限　　令和５年１月18日（水）まで

５　その他
（１）添付文書

①家庭科教員用　専教員用　≪質問用紙≫≪回答用紙≫	１部各１葉
②生徒用アンケート用紙　高３生徒用	１部１葉
③≪生徒用集計用紙≫　専生徒集計	１部１葉
④都道府県番号一覧	１部１葉

（２）回答内容については、本調査研究以外には利用いたしません。

＜問い合わせ先＞
全国高等学校長協会家庭部会
事務局長　加藤 路子
電　話　０３－３２６１－０６１７
ＦＡＸ　０３－３２８８－１６７０
ｅメール　all-kocho@katei-ed.or.jp

［資料１－３］

［ 質問用紙 ］ **専校長用**

全国高等学校長協会家庭部会 令和４年度「専門教育に関する調査研究委員会」アンケート

≪ＦＡＸ送信先≫ **０３－３２８８－１６７０**

都道府県番号	

都道府県名		学校名	

令和５年１月 18 日（水）までに本票のみ（鑑不要）ＦＡＸでお送りください。

■ 貴校について、下のⅠ～Ⅳにお答えください。設問Ⅱ以下の回答は右の回答欄の該当する番号に○、「その他（ ）」を選択した場合は、（ ）内に記入してください。その際、回答欄が不足する場合は空いてる所に分かるようにお書きください。

Ⅰ 貴校の家庭に関する学科について（該当する記号又は数字に○） ※被食等、複数分野の履修又は選択履修は「1 家政系」

設問		回答欄 ※設置学科の番号に○を付け、定員数や入学者選抜状況は、設置学科の欄にのみ記入してください。				
設置学科		1 家政系	2 被服系	3 食物系	4 保育系	5 その他（ ）
１学級の定員数(人) ※②の場合( )内に人数		① 40 ② 40 未満（ ）	① 40 ② 40 未満（ ）	① 40 ② 40 未満（ ）	① 40 ② 40 未満（ ）	① 40 ② 40 未満（ ）
入学者選抜状況 （令和4年度入学生）		① 定員充足 ② 定員不足	① 定員充足 ② 定員不足	① 定員充足 ② 定員不足	① 定員充足 ② 定員不足	① 定員充足 ② 定員不足
家庭科教員数	定数(人)	１ ２ ３ ４ ５ ６ ７ ８ ９ 10 11 以上（ 人）				
	欠員(人)	０ １ ２ ３ ４以上（ 人）				
家庭科実習助手（人）		０ １ ２ 以上（ 人）				

Ⅱ 家庭に関する学科の魅力・特色づくりについて

(1) 今後、貴校が「家庭に関する学科の魅力・特色づくりとして取り入れたい・充実させたい」と思うものをすべて選んでください。(複数回答可)

【 回答欄 】

Ⅱ(1)				
	①	②	③	④
	⑤	⑥	⑦	⑧
	⑨	⑩	⑪	⑫
	⑬	⑭	⑮	

① 国や県等の研究指定制度の活用　② 家庭科関係コース制の充実
③ 学校設定科目の設置　④ 少人数授業やティーム・ティーチング
⑤ 各種学科関連行事の充実　⑥ ホームプロジェクトの活性化や実績の向上
⑦ 学校家庭クラブ活動の活性化や実績の向上　⑧ 家庭科技術検定の活性化や実績の向上
⑨ ボランティアやインターンシップ等の体験活動
⑩ 進路指導（進学・就職）における実績向上
⑪ ＩＣＴ環境の充実　⑫ 施設・設備や周辺環境の充実
⑬ 大学や企業との連携　⑭ 地域との連携・交流活動
⑮ その他（具体的に記入）

⑮（具体的に）

(2) 家庭に関する学科の魅力・特色づくりを推進していくうえで、貴職が特に必要と考えることをすべて選んで答えてください。(複数回答可)

(2)				
	①	②	③	④
	⑤	⑥	⑦	⑧
	⑨	⑩		

① 国や県の施策　② 校長のビジョンやリーダーシップ
③ 職員の共通理解、意識改革　④ 大学入試制度の多様化
⑤ 各学校の自由裁量権の拡大　⑥ 財政的な裏付け
⑦ 情報発信の充実　⑧ 保護者の理解と協力
⑨ 地域社会の理解と協力　⑩ その他（具体的に記入）

⑩（具体的に）

Ⅲ 貴校の家庭に関する学科の魅力・特色ある教育活動に関わる情報発信について

(1) 発信方法の中で特に重視しているものを選んで答えてください。(複数回答可)

Ⅲ(1)				
	①	②	③	④
	⑤	⑥	⑦	⑧
	⑨	⑩	⑪	

① 学校案内　② 学校ホームページ　③ ＳＮＳ（学校・学科）
④ マスコミ（新聞等のマスメディア）　⑤ 中学校訪問
⑥ 中学生体験入学　⑦ 公開授業　⑧ 学校祭等の一般公開
⑨ 学科関連行事への招待　⑩ 地域との連携・交流活動
⑪ その他（具体的に記入）

⑪（具体的に）

(2) (1)のうちひとつ、特に工夫したり力を入れたりしている取組について、具体的に記入してください。

Ⅳ 「働き方改革」の視点から家庭科教員の負担軽減のために取り組んでいることがありましたら、具体的に記入してください。

☆アンケートへのご協力、ありがとうございました。

［資料１－４］

［ 質問用紙 ］ 専教員用

全国高等学校長協会家庭部会　令和４年度　専門教育に関するアンケート≪質問用紙≫

■貴校について、次の設問にお答えください（設問Ⅳは学科主任の方のみ）。回答は≪回答用紙≫の該当する番号に○を付け、「その他」を選択した場合には具体的に記入してください。

Ⅰ　貴校の家庭に関する学科に関する教育活動について、下の分類により(1)～(3)にお答えください。

①専門教科全般　②技術検定等の資格取得　③職業資格の取得（調理師免許等）
④学校家庭クラブ活動や地域との連携活動・交流活動　⑤学科に関する行事
⑥インターンシップ等進路に関する活動　⑦その他（　　）

(1) やりがいを感じる教育活動（複数回答可）
(2) 不安や負担感を感じる教育活動（複数回答可）
(3) 生徒の成長を感じる教育活動（複数回答可）

Ⅱ　あなたの勤務時間等について、(1)～(5)にお答えください。

(1) 超過勤務時間について（月平均超過時間とし、休日勤務時間を含む。ただし、長期休業中は除く。）
①ほぼ定時内で業務は遂行できている　②10 時間未満　③10 時間以上 45 時間未満
④45 時間以上 80 時間未満　⑤80 時間以上

(2) 超過勤務につながる業務について（特に多いものを３つ）
①教材研究　②実習準備・片付け　③テストや作品、提出物の採点　④授業補習
⑤技術検定指導　⑥学校家庭クラブ活動の指導　⑦学科行事の指導　⑧担任業務
⑨担任以外の校務分掌の業務　⑩学科や校務分掌に関する会議やその資料作成
⑪都道府県の教育研究会や技術検定等の事務局に関する業務　⑫その他（　　）

(3) 日常の自宅への持ち帰り業務について（月平均）
①ほとんどない　②１～５時間　③６～10 時間　④11～15 時間　⑤16 時間以上

(4) 業務負担軽減のために必要と感じること（複数回答可）
①教科指導の工夫・改善　②技術検定指導の工夫・改善　③地域連携・交流活動の精選
④学校家庭クラブ活動の工夫・改善　⑤学科行事の精選　⑥ICT 機器の活用
⑦教員間の教材の共有　⑧教員増　⑨実習助手の配置　⑩その他（　　）

(5) 業務負担軽減のために個人的に特に取り組んでいることがありましたら、記入してください。

Ⅲ　家庭学科設置校における勤務について、日頃感じていることを選んでください。（複数回答可）
①生徒の３年間での知識・技術や人間性の成長が顕著でやりがいがある。
②教科に関する専門性が高く、教師自身の知識・技術の向上につながる。
③生徒との関係性が深まり、喜びや感動が大きい。
④教科指導や学科行事等を通して学校外での人間関係が広がり、自分の成長につながる。
⑤家庭科教員が複数いることで、指導方法を学んだり相談したりすることができ、心強い。
⑥指導内容の専門性が高く、より専門性を深めなければ教えられないことが負担である。
⑦担当科目数や担当生徒数が多く、教材研究や採点、評価など負担が大きい。
⑧休日や放課後に検定などの実技指導や監督・審査などの負担が大きい。
⑨休日や放課後の学科行事指導や校外活動引率等の負担が大きい。
⑩その他（　　）

以下、学科主任の方のみご回答ください。

Ⅳ　貴校の家庭に関する学科の特色や魅力について、お答えください。

(1) 特色や魅力につながっていると考えられる取組について（複数回答可）
①専門教科　②学校設定科目　③技術検定等の資格取得　④職業資格の取得（調理師免許等）
⑤学校家庭クラブ活動や地域との連携活動・交流活動　⑥学科に関する行事
⑦インターンシップ等進路に関する活動　⑧その他（　　）

(2) 学科の特色や魅力に関する情報の発信方法について（複数回答可）
①学校案内　②学校ホームページ　③学校 SNS（学科 SNS）
④マスコミ（新聞等のマスメディア）　⑤中学校訪問　⑥中学生体験入学
⑦公開授業　⑧学校祭一般公開　⑨学科関連行事への招待　⑩地域連携・交流活動
⑪その他（　　）

(3) (1)の取組のうち、特に特色ある取組がありましたら、具体的に記入してください。

［資料１－５］

［ 質問用紙 ］ 高３生徒用

全国高等学校長協会家庭部会　令和４年度　専門教育に関するアンケート

■あなたの高校３年間を振り返って、下の設問にお答えください。回答は、回答欄の番号に○を付けてください。

【 回答欄 】

1	①	②	③	④
	⑤	⑥	⑦	⑧
	⑨	⑩	⑪	

1　高校進学に際して、志望校や志望学科を決める時に参考とした情報や活動等について、すべて選んで答えてください。（複数回答可）

①高校の学校案内　②高校のホームページ　③高校の SNS（学科 SNS）
④マスコミ（新聞等のマスメディア）　⑤高校の校長や先生による中学校での学校紹介
⑥高校における学校説明会や体験授業　⑦高校における公開授業
⑧高校の学校祭等の一般公開　⑨高校の招待行事への参加
⑩高校生が活躍する地域での活動や交流活動
⑪その他（　　）

⑪（その他）

2　現在の家庭に関する学科を志望した理由について、あてはまるものをすべて選んでください。（複数回答可）

2	①	②	③	④
	⑤	⑥	⑦	⑧

①家庭科が得意
②家庭に関する学科の学習内容に魅力を感じた
③家庭に関する学科の行事に魅力を感じた
④学校家庭クラブ活動や地域交流活動に魅力を感じた
⑤学科の学びの成果を進学や就職に生かせる
⑥資格が取得できる
⑦親や中学校の先生に勧められた
⑧その他（　　）

⑧（その他）

3　家庭に関する学科の３年間の学びで、自らの成長を感じたものは何ですか。（複数回答可）

3	①	②	③	④
	⑤	⑥	⑦	

①専門教科全般　②技術検定等の資格取得
③職業資格の取得（調理師免許等）
④学校家庭クラブ活動や地域との連携活動・交流活動
⑤学科に関する行事　⑥インターンシップ等進路に関する活動
⑦その他（　　）

⑦（その他）

4　現在の家庭に関する学科で学んでよかったと感じることは何ですか。（複数回答可）

4	①	②	③	④
	⑤	⑥	⑦	⑧
	⑨	⑩	⑪	⑫
	⑬	⑭	⑮	

①専門性が高く、高度な知識や技術が身に付いた
②資格を取得することができた
③学習内容に興味・関心が一層深まった
④集中力や忍耐力が高まった
⑤マナーや身だしなみ、衛生観念などが身に付いた
⑥作業をする時の順序や時間配分など、段取り力が身に付いた
⑦「努力してやればできる」と経験を重ね、自己肯定感が高まった
⑧協調性や仲間との連帯感が高まった
⑨積極性が高まった
⑩異年齢や多様な職業の人と接するなど、対人関係力が高まった
⑪将来の目標や就きたい仕事が見つかった
⑫学科での学びが進路実現に直接つながった
⑬家で調理するなど、学校で学んだことを生活に生かせる
⑭発表の場など様々な行事があり、楽しいことが多かった
⑮その他（　　）

⑮（その他）

5　現在学んでいる学科について中学生に PR するつもりで、簡潔に記入してください。（１～２文程度）

☆アンケートへのご協力、ありがとうございました。

［資料２－１］

４家第92号
令和５年２月13日

（　　）高等学校
校長　○○○○　様

全国高等学校長協会家庭部会
理事長　木次　愼一
（公印省略）
専門教育に関する調査研究委員会
委員長　若松　明子

令和４年度 専門教育に関する調査研究に係る実践事例の原稿執筆について（依頼）

梅花の候、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。平素から、当部会の諸事業にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、当調査研究委員会では「家庭に関する学科の魅力ある取組の可視化 ～働き方改革との両立を目指して～」をテーマに、令和４年度から２年間継続で調査研究を進めております。

本調査研究に際し、過日はアンケートにご協力を賜り、ありがとうございました。

この度、教員用アンケート結果をもとに、実践事例を紹介いただく学校について協議をした結果（別紙１）のとおりとなりました。

つきましては、ご多用のところ誠に恐縮に存じますが、アンケートにご回答くださいました貴校家庭科教員に別添文書により原稿執筆をご依頼くださいますようお願いいたします。

なお、原稿は令和６年５月配付予定の報告書に掲載いたします。

〈 問い合わせ先 〉
全国高等学校長協会家庭部会
事務局長　加藤　路子
TEL　０３－３２６１－０６１７
FAX　０３－３２８８－１６７０
E-mail　all-kocho@katei-ed.or.jp

［資料２－２］

４家第92号
令和５年２月13日

（　　）高等学校
教諭　○○○○　様

全国高等学校長協会家庭部会
理事長　木次　愼一
（公印省略）
専門教育に関する調査研究委員会
委員長　若松　明子

令和４年度 専門教育に関する調査研究に係る実践事例の原稿執筆について（依頼）

梅花の候、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。平素から、当部会の諸事業にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、当調査研究委員会では「家庭に関する学科の魅力ある取組の可視化 ～働き方改革との両立を目指して～」をテーマに令和４年度から２年間継続で調査研究を進めております。

本調査研究に際し、過日は調査研究の趣旨をご理解のうえアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。

この度、教員用アンケート結果をもとに、実践事例を紹介いただく学校について協議をした結果（別紙１）のとおりとなりました。

つきましては、ご多用のところ誠に恐縮に存じますが、貴校の実践についてご紹介いただきたく、下記のとおり原稿執筆にご協力をくださいますようお願いいたします。

記

1　執筆依頼テーマ
家庭科実践事例「家庭に関する学科の特色ある取組について」
（令和６年５月配付予定の報告書に掲載）

2　貴校に紹介していただきたい内容
（別紙１）に記載した貴校の箇所（内容）

3　書式・執筆要領
（別紙２）のとおり
※書式様式データをお送りするために、アドレスが必要となります。
件名を「専門事例」として、＜問い合わせ先＞のアドレスに学校名と氏名を記載して、２月22日（水）までに送信してください。

4　提出期限
令和５年３月31日（金）
※諸事情により遅れる場合は、ご連絡ください。
５月末を目途としますが、掲載写真の準備等で遅れる場合はご相談ください。

5　提出方法及び提出先
全国高等学校長協会家庭部会事務局　加藤宛、件名を「専門事例原稿（学校名）」として、メールにデータを添付してお送りください。

6　その他
原稿は冊子の統一等の都合により微調整をさせていただくこともありますので、ご了承ください。
報告書入稿前に原稿の確認をしていただきます。

〈 問い合わせ先 〉
全国高等学校長協会家庭部会
事務局長　加藤　路子
TEL　０３－３２６１－０６１７
FAX　０３－３２８８－１６７０
E-mail　all-kocho@katei-ed.or.jp

実践事例

家庭に関する学科の特色ある取組について

「実践事例」一覧

◆テーマ「家庭に関する学科の特色ある取組について」

No	内　容	都　県 学校名	校長名	教員名	タ イ ト ル	頁
1	伝統文化 課題研究	岩手県 花北青雲 高等学校	佐々木伸良	高 橋 伯 枝	総合生活科の特色ある授業 ～生活文化の継承と商品開発～	28
2	和装登校	千葉県 佐倉東 高等学校	木 次 愼 一	仁平知恵利	和裁コースにおける 「和服登校」の実施	30
3	国際交流	東京都 忍岡 高等学校	造 作 聡 美	神 川 早 希	忍岡高等学校生活科学科で行う フランス服飾学校との国際交流について	32
4	地域貢献	愛知県 安城 高等学校	羽佐田透一	杉浦枝理子	専門学科の学びを生かした地域貢献活動	34
5	集団給食 学科の行事	徳島県 小松島西 高等学校	蔭 岡 弘 知	多田加奈子	継続する理由と継続するために 必要なこと ～集団給食室を生かした教育～	36
6	生活文化の 伝承	香川県 高松南 高等学校	吉 田　　稔	陶 山 真 澄	学校設定科目「さぬきの生活伝承」で 学び、郷土への愛着心を	38
7	地域連携	福岡県 香椎 高等学校	稲 富　　勉	西 嶋 祐 子	夢を“カタチ”に ～地域と連携した実践的な学習活動～	40
8	小高連携 地域連携	宮崎県 延岡工業 高等学校	山 内 武 幸	田牧由佳里	『地域を潤す源流となる人材』を育む ～学科の学びを生かし、地域との 交流を深め、絆を育む～	42
9	地域貢献	宮崎県 飯野 高等学校	間 曽 妙 子	松浦真由美	「課題研究」における地域支援活動	44

※校長名・教員名は令和４年度現在です。

【令和４・５年度　専門教育に関する調査研究委員会】

総合生活科の特色ある授業
～生活文化の継承と商品開発～

学校名	岩手県立花北青雲高等学校	所在地	〒 028－3172 岩手県花巻市石鳥谷町北寺林11-1825-1 TEL：0198－45－3731 http：//www2.iwate-ed.jp/hkb-h//
校長名	佐々木　伸良		

〈学校概要〉本校は昭和 49 年に花巻北高等学校より商業高校として分離独立後、平成 15 年度からは情報工学科、ビジネス情報科、総合生活科の３学科を持つ総合的専門高校である。総合生活科は、２年生から「児童・高齢者福祉コース」と「地域生活文化コース」に分かれ、専門知識の習得と、実践力の向上に努めるとともに、地域社会に貢献できる広い視野を持った人材の育成を目指している。

実　践　の　紹　介

実施学科	実施学年	記載者氏名	
総合生活科	３年	高橋　伯枝	

１　実践のねらい

学校設定科目「生活教養」を３年生に２単位学習する。その中で「茶道」「華道」「装道」「書道」を 10 時間ずつ計 40 時間、専門の講師を招聘し、体験的な学習を通し、基礎的な知識と技術を習得するとともに、日本文化について学ぶ。平成 15 年度、総合生活科の創設当初より継続している。

「課題研究」は、２年生・３年生にそれぞれ２単位学習する。３年生には、主に地域の特色を生かした商品開発に取り組み、地域振興を通して課題解決力の向上を目指し、自ら学び、生活産業の発展や社会貢献の主体的かつ協働的に取り組む態度を養うことを目標としている。

２　実践内容

（１）「生活教養」について

週１回、２時間連続授業で実施。講師の先生方は本校の非常勤講師である。

①茶道（写真 1）

４月～５月に５回実施。「裏千家」の講師を招聘し、茶道の歴史・和室のマナー・お茶とお菓子のいただき方・お点前を学び、最後はお茶会を行う。菓子代は実習費より支出。

②華道（写真 2）

５月～６月に５回実施。「池坊」の講師を招聘し、いけばなの歴史・礼儀作法・生け方の基礎（生花正風体と自由花）について学ぶ。花材代１回 1,000 円は実習費より支出。

写真１　茶道

写真２　華道

写真３　装道

写真４　書道

③装道（写真 3）

７～９月に５回実施。着付けの先生を講師として招聘し、浴衣（単衣長着）について、歴史・着装・扱い方を学び、最後は半幅帯を使用して自分自身で着装し、発表会を行う。

④書道（写真 4）

10 月～12 月に５回実施。本校の書道講師から、書道の道具・歴史・祝儀袋・はがきの書き方など、「暮らしの書」について学び、小筆で年賀状の表面を書き上げる。

（２）「課題研究」について

４～５月に地元企業の代表取締役社長から「地域の特産品の活かし方」「新商品開発の行程・コンセプト」等について講演をしていただき、起業家精神を理解する。

５月中旬から新商品の開発に向けて取り組む。10 月に行われる文化祭で販売することを目標に、各グループで地域の特産を活かした商品を開発する。地域の特産品を調べ、コンセプトを設定し、使用する素材の選定、企業との打ち合わせ、試作と改良を繰り返し、商品化を目指す。

令和元年度までは、商品の考案から試作を重ね、自分たちで調理したものを文化祭で販売していたが、新型コロナウイルス感染症の流行により、調理したものの販売を見合わせることとなった。令和３年度からは地元の企業にご協力をいただいて商品化し、販売することが可能となった。文化祭のほか、岩手県産業教育フォーラムにおいても商品販売を行った(写真 5)。

写真 5

＜販売した商品＞

年度	商　　品	価格	協力企業	写真
令和３年度	栄養満点！特産品お弁当	800 円	遊民	6
令和４年度	洋風きりせんしょ	150 円	岩手阿部製粉(株)	7
	からふる一つ団子	250 円	(有)菓匠丸文	8
	リンゴとゴールデンベリーのガレット	150 円	(株) みちのく創彩菓子砂田屋	9

写真 6

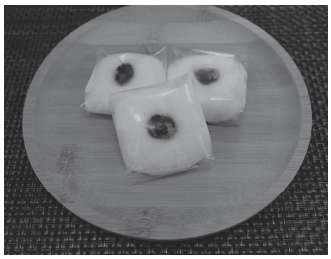


写真 7

写真 8

写真 9

３　成果

「生活教養」については、生活様式が変化し、このような日本の伝統文化を経験したことがない生徒がほとんどであり、授業を通して経験することによって、日本の文化を継承する重要な役割を果たしている。

「課題研究」の商品開発については、生徒が主体的に取り組み、企業の協力により商品化することができたことは、生徒たちにとって自信となり、地元を理解する良い機会となっている。「商品開発をするに当たって、自分が生まれ育った故郷である花巻市について調べ、全国に誇れる様々な特産品があることや、今私たちの食生活全体を豊かにしているきっかけである郷土料理について学ぶことができ、改めて地元の良さや魅力を知ることができた」「店頭の商品は、販売するまでに試行錯誤をして様々な人の意見が反映されていることを実感した」という生徒の感想からも成果を感じ取ることができる。

４　今後の課題

「生活教養」については、授業の中で体験できることは生徒にとって大変貴重な機会となっているので、講師の先生方の協力を得ながら、今後も可能な限り継続していきたい。

「課題研究」の商品開発は、これまでは単年度の取組として終えていたが、地元企業の協力を得られたことを活かし、商品を改良しながら継続して取り組み、本校総合生活科の開発商品が、花巻市の特産品として定着できるよう取り組んでいきたい。

和裁コースにおける「和服登校」の実施

学校名	千葉県立佐倉東高等学校	所在地	〒 285－0017 千葉県佐倉市城内町278 ＴＥＬ：043－484－1024 http：// cms2.chiba-c.ed.jp/sakurahigashi-h/
校長名	木次　慎一		

〈学校概要〉本校は、明治40年に佐倉町立佐倉女子技芸学校として開校し、昭和36年に千葉県立佐倉東高等学校と改称され、平成17年に共学となり、現在は、服飾デザイン科、調理国際科、普通科の三つの学科を有している。服飾デザイン科は県内公立高等学校で唯一の学科で、服飾やデザインに関する専門的知識や技能を習得させ、将来の服飾関連業界のスペシャリストの育成を目指している。

実　践　の　紹　介

実施学科	実施学年	記載者氏名	
服飾デザイン科	３年	仁平　知恵利	

１　実践のねらい

服飾デザイン科では、12月に和裁コース３年生の生徒たちが、自分で製作した和服を自宅から着て登校し、学校生活を和服で過ごす「和服登校」という行事を行っている。和裁コースでは、着付け講習会や着装の発表等を行うことで和服の着付けを身に付けるため、和服登校は、その成果を披露する場となっている。また和服で登校することで、着装した生徒ばかりでなく、周りの生徒にも和服文化を身近に感じてもらう良い機会となる。また校内だけでなく、通学途中や地域の方々から登校風景を見ていただくことで、本校の服飾デザイン科・和服コースの学習活動を知ってもらう良い機会になっている。

２　実践内容

本校では、２年生から洋裁コースと和裁コースに分かれ、ファッション造形と課題研究でコース別の学習を行っている。和裁コースでは、はじめに女物浴衣・男物浴衣を製作し、次に絹物の単衣長着、袷長着を製作した後、３年生は振袖や道行コートの製作を行っている。また、プロの和裁士を招き、１年生は全員が週１時間、運針などの基礎縫い・和小物作りなど、２年生は週に２時間、和裁コースの男物浴衣の製作の指導をいただいている。和裁士から、プロならではの道具の使い方や布地の扱い方、製作のコツなど細かい点まで教えていただくことで、生徒ばかりでなく我々教員も大変勉強になっている。プロに直接、指導をいただくことにより、和裁を職業として身近に感じ、卒業後に「和裁士」を目指す生徒もいる。

また、和裁コースの生徒は、和服の着付けの学習にも、着付け師を招き、２年生で４回、３年生で５回、着付けの講習会を行っている。和服用下着の身に着け方、補正の仕方、着物の着方の基本、帯のしめ方など丁寧に指導していただいている。全く自分で着たことがなかった生徒も、少しずつ着方を覚えていき、３年生になると着物の着付けができるようになる。また、和服を着た時の立ち振る舞いや礼儀作法などの指導もいただき、和服文化を広く学習できる有意義な時間となっている。

着付け講習会

服飾デザイン科の集大成であるファッションショーでは、和裁コースの生徒全員が振袖を着用するため、生徒の人数に合わせて着付け師にボランティアで、生徒の着付けをしていただいている。生徒は、はじめ、小紋や紬、袴を着用した後、浴衣、テーマ学習で製作した衣装や自由作品を順に着て出て、最後に振袖になるが、着付け師には、最初の和服の着付けと最後の振袖への早着替えをお願いしている。リハーサルと本番の日には、着付け師に来ていただいているが、練習では、振袖以外は自分たちで着ているため、繰り返し着る練習をすることで着付けが上達していき、自信を付けていくことができる。また、生徒たちはリハーサルと本番の日に、一人の着付け師に付きっきりで世話になるため、その間に様々な話を聞いて、多くのことを学ぶ良い機会となり、舞台裏での時間も大変有意義なものとなっている。

和服登校の実施に伴い、11月に行う最後の着付け講習会で、小紋や袴など、実際に和服登校で着る予定のものを一人で着る練習をする。そこで着付けに必要な小物、着付けにかかる時間を確認し、着付け師からきれいに着るためのコツを教わるなどして、当日に臨む。生徒は自分の着る和服にあわせて、バックや履物などのコーディネートを考え、生徒にとっても大変楽しみな行事となっている。

和服登校の様子は、ケーブルテレビや地域の新聞等マスコミで報道され、地域の方々へその魅力を発信することができる。

和服登校の様子

3　成果

１年生からの小物製作の学習、２年生からの和服製作・着付けの学習を通して、知識・技術を学ぶだけでなく、和服文化を身近に感じ、親しむことができている。和服登校は和裁コースならではの学習の集大成の一つにもなっており、製作した着物をファッションショーとは別の形で披露できるという点で、達成感と充実感を得ることができる。

また、製作した着物を自ら着て登校することで、その姿を家族や地域の方々に見ていただいたり、登校してからも校内で注目されることで、和服を着ることへの自信にもつながっている。和裁コース以外の生徒たちも、和裁コースの生徒たちが和服で登校し、学校生活を送っている姿を見ることで、和服文化を身近に感じる良い機会となっている。地域の方々からは、季節の風物詩としての評判も得ており、また地域の新聞や県民だより等に掲載された際には、それを見た県民の方から多くの反響があり、本校のPRにもつながっている。

和服登校は、和裁コースの学習の成果として、自校だけでなく、地域等にもその魅力を広く発信出来ることから、行事の一環として今後も続けていきたいと思う。

4　今後の課題

服飾デザイン科の和裁コースでは、和服の製作や着付けなどより多くの専門性を必要とするので、家庭科教員の技量だけでは指導が難しい場合がある。現在、和裁士や着付け師に様々な指導をいただいているおかげで、日頃の製作活動やファッションショーなど行うことができている。しかしながら、指導者の人材確保が難しい年もあり、予定した講習会ができなかったこともある。生徒たちが和裁や着付けの技術を習得するために、毎年継続して、講師の人材確保ができるよう努めていかなければならない。また、教員自身も知識や技術を向上させるために、より一層の経験と研修を積む必要がある。これまでは個人的に外部で研修をすることもあったが、業務多忙な中で、その時間を確保することも難しく、思うように研修ができていないのが現状である。研修の場と時間を確保し、今後の学習指導に役立てていくことが、今後の大きな課題である。

忍岡高等学校生活科学科で行うフランス服飾学校との国際交流について

学校名	東京都立忍岡高等学校	所在地	〒 111－0053 東京都台東区浅草橋五丁目 1 番 24 号 TEL：03－3863－3131 https：//www.metro.ed.jp/shinobugaoka-h/
校長名	造作　聡美		

〈学校概要〉本校は、創立 111 年目となる歴史と伝統ある学校である。全日制単位制高等学校に改編されて 17 年目となり、普通科４クラス、家庭に関する専門学科２クラスを設置している。

生活科学科では「将来のスペシャリストとして必要な資質や能力を育てる」ことを目標に掲げ、家庭に関する専門科目を豊富に揃えており、充実した設備、施設・機器を使い、少人数制授業によるきめ細かな指導で、幅広い知識と確かな技術、豊かな人間性を育成している。

実　践　の　紹　介

実施学科	実施学年	記載者氏名	
生活科学科	１年・２年・３年	神川　早希	

１　実践のねらい

2020 年にフランスのパリにあるポール・ポワレ校と学校間交流パートナーシップ協定を締結した。「ポール・ポワレ」とは脱・コルセットで女性のボディを解放したフランスのパイオニア的デザイナーである。彼の名を学校名に用いた学校、ポール・ポワレ校は、15 歳から 22 歳までの生徒にファッションと演劇の分野で芸術と技術を開発するために職業訓練を行っている公立の学校である。卒業する前に試験を受け、モード衣服に関する職業バカロレアや、工芸・デザイン等のフランスの国家資格である職業適性証（CAP)を取得できる。ファッション業界を将来の職業として目指す生徒達が互いの文化や価値観の違いに触れながら、国際的な視野をもった職業人になるように交流を進めていくことがねらいである。

２　実践内容

（１）コロナ禍での交流

2020 年度、2021 年度は互いの作品交換のみの交流であった。本校からは甚平などの日本らしい生徒作品を送り、ポール・ポワレ校からはデザイン画や、ブルゴーニュのホテルをイメージした舞台衣装のビスチェなど、フランスでファッションを学ぶ学校らしい作品が送られてきた。また、2020 年に協定を結んだ際、ポール・ポワレ校から贈呈されたノベルティのファイルケースは、手縫いやミシン縫いを駆使した丁寧な作品だった。本校では同様の製法で、素材は手ぬぐい店「にじゆら」の注染で製作した本校オリジナル手ぬぐいを用いてファイルケースを縫製し、ポール・ポワレ校へ寄贈した。

（２）「第 46 回全国高等学校総合文化祭東京大会」の開会式にむけてのオンライン交流

「第 46 回全国高等学校総合文化祭東京大会」(以下略称である「とうきょう総文 2022」と記す)でのファッションショーが具体的に進み始めた 2022 年 5 月 21 日に、来日予定のポール・ポワレ校の生徒と本校生徒でオンライン交流を行った。東京音頭を教えながら踊り、日本文化について説明した。ポール・ポワレ校の生徒にもフランスからオンラインで東京音頭を踊ってもらい、生徒は言語だけではないコミュニケーションがあることを実感していた。

（3）「とうきょう総文 2022」開会式のための来日と交流

2022 年 7 月 31 日に、東京国際フォーラムで開催された「とうきょう総文 2022」の開会式Ⅱ部で国際交流の一環としてファッションショーを共催するために、生徒９名と教員６名合わせて 15 名が来日した。

7 月 27 日夕方、都内ホテルにて開かれた「とうきょう総文 2022」スタッフ主催の国際交流会に、ポール・ポワレ校と本校代表生徒が参加し、初めて実際に会って交流ができた。7 月 29 日午前、本校にポール・ポワレ校の生徒と教員が初めて来校した。生徒が浴衣を着てお迎えをし、オンライン交流で踊り方を伝えた東京音頭を一緒に踊ることができた。

7 月 29 日午後と 30 日には、東京国際フォーラムホール A でファッションショーの際に着用する衣装の最終確認とリハーサルを行った。主に、ポール・ポワレ校の教員から指導を受け、ウォーキング練習を行った。当初、生徒はフランスの生徒と同じシーンに出演するのに、意思疎通が思うようにいかず戸惑っていたが、次第に英語などで積極的にコミュニケーションを取るようになった。着替えのあるモデル生徒は普段着慣れないフランスのドレスを早く着用するために、動線の確認や着替え練習に力を入れた。本番 7 月 31 日、開会式 2 部国際交流の場面では、大勢の観客の前で堂々としたファッションショーができた。

ポール・ポワレ校の生徒と「とうきょう総文」控室で

ポール・ポワレ校の生徒たちとの交流

（4）「令和４年度次期開催都市パリへのオリンピック・パラリンピック教育の継承事業」による本校生徒パリ派遣での交流

次期開催地であるパリでのオリンピック・パラリンピックに向けた東京都の国際交流の一環で、本校生活科学科生徒４名と教員１名が、東京都代表のメンバーとして 2023 年１月 30 日から２月３日までパリへ派遣された。生活科学科で学ぶ生徒の視点から日本文化に関するプレゼンテーションを行い、ポール・ポワレ校の生徒とルーブル美術館を見学したり、宿舎にも面会に来てもらったりして交流を深めることができた。

３　成果

忍岡高校の生徒とフランスの生徒が交流をもつことで、ヨーロッパのフランス文化に触れ、自らの国の文化もより具体的・客観的に見て、伝えることができるようになった。ポール・ポワレ校の生徒とは「ファッション」という共通の話題があるため、片言の英語や画像、SNS を用いてファッションブランドについて意思疎通を図っていた。生徒同士が SNS の翻訳機能を用いてやりとりする姿を見ると、我々が思う以上に生徒はスマートフォンのアプリケーションツールを活用して交流を深めていけるように思えた。

４　今後の課題

今年度は、フランスのポール・ポワレ校と国際交流を進めることができたが、本校は、ファッションだけではなく、食や保育の分野にも力を入れている専門学科である。そのため、次年度以降、ファッションにおける国際交流だけではなく、家庭科に関する広い分野でも国際交流に取り組む必要性を感じている。これからの世界で、食やファッション・保育などを担っていく専門学科高校の生徒として必要な国際性をどのように育んでいけるのかを課題とし、基礎となる自国の文化への理解を深めさせながら交流に取り組んでいきたい。

専門学科の学びを生かした地域貢献活動

学校名	愛知県立安城高等学校	所在地	〒 446－0046 愛知県安城市赤松町大北103号 TEL：0566－76－6218 http：//anjo-h.aichi-c.ed.jp/cms/
校長名	羽佐田　透一		

〈学校概要〉本校は2020年に創立100周年を迎えた伝統校である。全日制と定時制課程を併置し、全日制は１学年普通科６クラス、生活文化科２クラスの総生徒数920名程である。教育スローガンを「きっとできる　できるまでやる」とし、「夢の実現に向けて主体的・協働的に学び、最後までやり抜く力をもつ生徒」と「自ら考え責任をもって行動し、他者と協力して社会貢献できる生徒」の育成を目指している。

実　践　の　紹　介

実施学科	実施学年	記載者氏名	
生活文化科	２年・３年・希望者	杉浦　枝理子	

１　実践のねらい

本校の生活文化科では、専門学科としての特色を生かし学習内容を工夫している。１年生で、将来の進路決定の基礎となる科目を学び、２年生からは興味・関心、進路に応じて「ファッション造形」と「調理」のいずれかの科目を選択して専門性を深めている。３年生では「ファッションコース」「フードコース」「保育コース」の３コースに分かれ資格取得を目指し、さらに技術の向上や専門性を深め、応用力を養うことを目標としている。本校生徒は比較的落ち着いており、素直で向上心のある生徒が多いが、総じて主体性、自主性という面が強くなく、その育成が本校の課題である。そこでボランティア活動を通して、主体的に行動できる力と自ら考え責任をもって行動する力、他者と協力し社会貢献できる力やコミュニケーション力の育成をねらいとしている。

２　実践内容

本校のボランティア活動は、１年生で「福祉施設ボランティア活動」を行い、２年生より興味・関心に応じて「ファッション」「フード」「保育」の３分野から１分野を選択して活動し、３年生希望者のみが活動している。全ての活動は授業後行っている。家庭クラブ活動の一環として位置付けされ、活動経費は家庭クラブの活動費や国際ソロプチミストからの支援金で賄っている。

（１）福祉施設ボランティア活動

障がいのある方の授産施設で、利用者さんと一緒にエコキャップの選別や梱包作業などのお手伝いをしている。主に考査最終日や保護者会の授業後を利用し、年間 20 回程度、毎回４～５名が施設に行って活動している。

（2）服育推進ボランティア活動（通称名：ミシェル）

余り布で幼児の水筒用ベルトやランチョンマットなどの手作り小物を製作し、地域のイベントで販売している。作品製作は月に２回、販売活動は年に２回程度行っている。

販売活動の様子

販売した手作り小物

（3）食育推進ボランティア活動（通称名：ハッピーキッチン）

地域の特産品を使用して企業や福祉施設、専門高校と連携し、商品開発と販売活動をしている。また公民館から依頼を受け食育講座も行っている。活動日は月に２回程度、状況に応じて臨時に活動している。食育講座は長期休業中に１回程度だが、食育講座は新型コロナウイルス感染症の影響で、2020年より実施できていない。

開発商品の試作風景

開発商品

販売活動の様子

食育講座の様子

（4）児童福祉ボランティア活動（通称名：ソレイユ）

子供発達支援センターからの依頼を受け、年中行事に合わせた壁面飾りを製作し展示している。またその施設のお祭りのお手伝いもしている。作品製作は月に１回、年間10作品を製作し、施設に展示している。

作品製作の風景

端午の節句をテーマとした展示作品

お祭りの様子

３　成果

生徒たちは、ファッション、フード、保育の各専門分野で学んだ知識や技術を生かし、応用力や実践力を身に付けている。課題に対して自ら調べ、研究し改善策を考え行動しているため、問題解決能力や企画・発想力が養われ、生徒が主体的に学んでいる。またグループ活動を通して、仲間を尊重し助け合う姿勢が見受けられ、協調性も身に付いている。地域に貢献することで生徒たちの視野が広がり、社会性やコミュニケーション力が身に付いた。そして一番の成果は、自分の知識や技術が地域の人々の役に立っているという喜びとものづくりの楽しさを実感し、将来の進路選択の参考となっていることである。このことは、各専門分野のミドルリーダーの育成にも繋がり大きな成果と言える。

４　今後の課題

全てのボランティア活動は、授業外で活動しているため、活動できる時間が限られており、部活動との両立が容易ではない。販売活動や食育講座等は休日に行われることが多く、担当教員の負担も少なくないことも課題である。今後はこのような活動の一部を「課題研究」の科目などに取り入れ、授業内でも取り組めるようにしたい。

継続する理由と継続するために必要なこと
～集団給食室を生かした教育～

学校名	徳島県立小松島西高等学校	所在地	〒 773－0015 徳島県小松島市中田町字原ノ下28の1 TEL：0885－32－0129 http：//komatsushimanishi-hs.tokushima-ec.ed.jp
校長名	蔭岡　弘知		

〈学校概要〉本校は、商業科、食物科、生活文化科、福祉科の四学科を有する全校生徒約540名、創立72年目の専門高校である。食物科は高校卒業と同時に調理師免許が取得できる県内唯一の専門学科で、定員は１学年２クラスの70名である。食物科担当教員は現在、講師１名・実習助手２名を含めた11名であり、全員が調理師免許を有し、その内の７名が管理栄養士の資格を持っている。調理実習では、１年生で日本料理、２年生で中国料理、３年生で西洋料理をプロの料理人が指導している。約半数が就職しており、調理関係ではホテルやレストラン、病院や老健施設の希望者が多い。進学では、地元の私立大学で管理栄養士等の資格取得を目指す生徒が多くを占めている。

実　践　の　紹　介

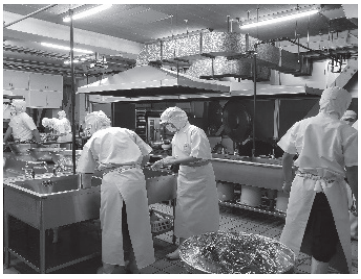
実施学科	実施学年	記載者氏名	
家庭科（食物科）	２年・３年	多田　加奈子	

１　実践のねらい

食物科は、昭和 42 年に調理師養成施設の認可を受け、現場実習に代わるものとして、生徒が毎日交替で実習できるように生徒・職員の昼食希望者の給食を兼ねた集団給食を開始した。以前は３年生のみが実施していたが、約 10 年前から３年生が２年生に作業の手順を教えるなどで縦の繋がりを大切にしている。毎年２年生では、校外施設での５日間のインターンシップを実施していることに加えて、集団給食実習で２年間かけて得られるものは大きく、今後も継続していきたい教育実践である。また、ミニカフェ＋は、平成 19 年～21 年度文部科学省指定の「目指せスペシャリスト（スーパー専門高校）」で始めた取組の１つである。調理実習の専門科目の学習で身に付けた知識・技術を生かし、献立作成や調理、接客等を体験し、充実感や達成感を味わうことで、食産業に従事する人材育成につなげている。

２　実践内容

集団給食実習は、２年生が年間４回、３年生が年間８回の輪番で担当し、毎日約 200 食の調理を行う。令和４年度は４月 19 日から令和５年２月 22 日まで学校行事等で実施出来ない日を除き、102 回食事を提供した。１食 400 円を集金し、その９割が食材費・調味料費で、残り１割が消毒や洗剤、消耗品、ガス代などである。



1　集団給食実習風景

2　集団給食献立例

１回の実習には生徒８名が入り、本校卒業生で調理師や管理栄養士の資格を有する教員等２名が担当している。生徒は朝７時に集合し、その日の５限目が終わるまで実習を行い、６限目以降は各自教室で授業を受けている。朝７時から始業時間まで、及び昼休みの昼食提供時間と前日放課後の打ち合わせ時間を合わせ、合計３時間を「調理実習」の授業時間数に読み替えている。学校設定科目であるこの「集団給食」は、２年生に１単位履修している。大量調理についての説明や献立作成などの座学が中心となっており、集団給食実習の実習担当以外の教員が教室で授業を行っている。（写真１・2）

次に、ミニカフェ＋は、本校の集団給食施設を有効活用しようと始めた取組である。集団給食室（総合調理実習室）は、日々の給食営業のために営業許可を取っている施設であり、こうした強みを生かし、「総合調理実習」の授業の中で地域の方々を対象に料理を提供している。ミニカフェ＋は２年生の 11 月に１回、３年生の６月に１回実施している。食物科は各学年に２クラスあるため、年間４回実施し、地域の方々を対象に、１食 800 円（食後の飲み物・デザート付）で提供している。（写真 3）

3　R4.6.11ミニカフェ＋献立

4　焼き菓子・パンの販売

5　ケーキの販売

6　盛り付け作業

7　R4.11.12ミニカフェ＋

8　カフェでの接客の様子

１食 800 円の内訳は、ほぼ食材費であり、ミニカフェを始めた当初から 11 年間は１食 500 円で和食・洋食それぞれ 50 食ずつを提供していたが、食材費の高騰と指導する担当教員の負担の大きさなどを考え、コロナ前に価格を上げ、和食のみ 100 食を提供するミニカフェ＋に変更した。その後コロナ禍での密を避けるため、100 食を 70 食に変更した。食券の販売方法についても、以前は２時間以上前から食券を求める行列ができ、その対応に苦慮していたが、令和３年度に学校ＨＰからのネット予約販売に変更した。令和４年 11 月の食券販売については約１時間で完売となるほどの人気である。

また、ミニカフェ＋では、担当クラス以外のクラスの協力を得て準備したケーキ・焼き菓子・パンも低価格で販売しており、毎回好評である。（写真 4・5）土曜日に開催することが多く、担当クラスの生徒は朝７時に登校して全員で調理を開始し、午前 11 時から各担当に分かれ、料理の仕上げ、接客（販売）、後片付けを行っている。（写真 6・7・8）午後２時 30 分頃全員そろって昼食（まかない）を食べ、午後４時に反省会を行い、１日が終了となる。その日は授業日に設定しており、「総合調理実習」６時間の実施としている。

ミニカフェ＋は毎回、献立作成から始まる。テーマを決めて、献立ごとのグループに分かれ、それぞれが考えてきたレシピの試作を最大４回（総合調理実習２時間×４回）実施し、一つ一つの料理の完成度と全体のバランスをみて献立を決定する。本番前にはリハーサルを行い、当日に向けて最終確認を行うなど苦労して考えた料理だからこそ、地域の方々から美味しいとの評価をいただいたときの喜びはひとしおである。

３　成果

令和４年度２年生のアンケート結果から、生徒全員が次年度に向けても頑張って取り組みたいと回答した。３年生は昨年度以上に積極的に働き、集団給食実習では、不安を感じている２年生をサポートしていきたいという思いのもとミニカフェ＋では、２年生に感じた充実感や達成感をさらに上回るような成功を収めたいとの気合いが感じられた。さらにこれらの活動を通して、それぞれ自分自身が成長したと実感している。本校がスクールポリシーに掲げている「食関連分野で活躍できる力の育成」「コミュニケーション力」などはこうした取組が基盤となっており、本校食物科の多様な活動の中でも重要な教育活動になっている。

４　今後の課題

教育効果が高い反面、教員にとっては負担増となっている。全ての教員は使命感や向上心を持って日々の職務にまい進しているが、今後は、持続可能な取組となるように、業務内容の効率化を図っていくことも重要であると認識し、教員間での連携を更に深めていきたい。

学校設定科目「さぬきの生活伝承」で学び、郷土への愛着心を

学校名	香川県立高松南高等学校	所在地	〒 761－8084 香川県高松市一宮町531番地 TEL：087－885－1131 https：//www.kagawa-edu.jp/minamh02/htdos/
校長名	吉田　　稔		

〈学校概要〉普通科４クラス、環境科学科１クラス、生活デザイン科１クラス、看護科１クラス及び福祉科１クラスの５学科と専攻科看護科１クラスのある総合制高校で、生徒約900名が学んでいる。

生活デザイン科では、多様な進路希望に対応できるように２年生より「健康栄養」「服飾デザイン」「保育子ども文化」の三つのコースに分かれ、学習効果を上げ、専門性を深めている。

実　践　の　紹　介

実施学科	実施学年	記載者氏名	
生活デザイン科	２年	陶山　真澄	

１　実践のねらい

平成25年度生活デザイン科入学生から、２年生での学校設定科目として「さぬきの生活伝承」（２単位）を全員で履修している。自分たちが生まれ育った郷土香川の生活文化について学ぶことを通し、郷土に対する愛着心をもつとともに、生活文化の伝承や創造に寄与する能力や態度を育てることを目指している。郷土の生活文化について調べ、自分たちの周りにある、もしくは失われつつある生活に関わる文化を知ること、保多織や畳縁を利用した手芸や水引細工、四季折々の郷土料理について学習し実習すること、地場産業に関連する企業等を見学することなどを通じ体験的に学べるようにする。

２　実践内容

（１）代表的な年間の実践内容

１学期　　春夏の代表的な食品加工・郷土料理作りや郷土の手工芸品の製作を行う。

・押し抜きずし、そうめんの節汁、ちしゃもみ、なすそうめん、はげだんご

・保多織の端切れを使っての手芸作品製作

２学期　　秋の代表的な郷土料理・保存食作りや郷土の手工芸品の製作を行う。

・いりこ飯、団子汁、切り干し大根のはりはり、おはぎ、和三盆型抜きあん餅雑煮、柿のおろしあえ

・かがりてまり、畳縁を使っての手芸作品

３学期　　冬の代表的な郷土料理・行事食作りや郷土の手工芸品の製作を行う。

・打ち込み汁、いもようかん

・水引細工

・実習は少人数で丁寧に指導できるように、調理実習班と手工芸製作班の二つに分かれて交代で行う。

・学期を問わず、郷土の生活文化について調べ学習を行い、成果の発表を行う。

（２）校外学習（３か所程度　２回実施）　　工場や資料館を見学し、地域の産業や特産物の製造工程を知る。

＜平成26年度より訪問した企業＞

和三盆糖（ばいこう堂）　うどん（石丸製麺）　醤油（かめびし醤油、広瀬醤油）

手袋（サンエース）（食品工場についてはコロナ禍の影響で実施できない年がある）

うちわ（うちわの港ミュージアム）　塩（塩業資料館）　香川の特産物（栗林庵）

調理実習「打ち込みうどん、いもようかん」

作品製作「保多織を使った作品、水引細工等」

校外学習「醤油蔵」

校外学習「うちわ作り」

（校外学習バス代は生活デザイン科運営費（県費）から支払っている。）

3　成果

生徒の多くは小学生の頃から香川の歴史について学んできたようで、ある程度の香川の歴史や特産品は知っていたが、それ以上に郷土料理や伝統工芸が多くあったことでうれしく感じている。「うどん」が有名であるので「うどん」しかないと思われがちだが、伝統ある特産品が多くあることを知り、香川のイメージがより良いものになったようである。以下に授業を受けての生徒の感想を抜粋する。

・香川県に住んでいても知らないことばかりだったので、香川に興味がもてるようになった。
・今の時代、普通に生活しているなかでは、触れることのなかったものに触れることができてよかった。
・実際に調理したり、作品を作り、体験できてよかった。
・他の学科では受けられない授業を受けられて、知ることのできない地元の良さを知れた。

これらは生徒の感想の代表的なものであるが、実習や見学などの体験を通じて、地元の生活文化について楽しく学ぶことができたという生徒がほとんどである。

生徒は、学習したことを、家庭料理や行事で活用し、伝統工芸品を購入し利用することで今後の生活に活かしたい、また、将来自分の子どもにも伝えたいと感じている。生活文化は、もともと家庭の中で親から子へという形で伝承していくものなので、生徒それぞれが郷土の生活文化について知り、生活の中で活かしたい、自分の子どもや家族、周りの人に伝えたいと思ってくれることが成果である。

4　今後の課題

本校では、郷土の生活文化に関して知識のある教員が複数在籍している。異動によってメンバーが変わっても、「さぬきの生活伝承」を継続して指導するためには、教材研究する教員への援助等が欠かせない。そのために、指導法や教材等を共有できるシステムをつくる必要がある。また、現在この科目に関わっている教員も、生徒にとって有意義な内容となるよう、常に情報収集に努め、教材研究をする必要がある。

夢を“カタチ”に　～地域と連携した実践的な学習活動～

学校名	福岡県立香椎高等学校	所在地	〒 813－0011 福岡県福岡市東区香椎２丁目９番１号 ＴＥＬ：092－681－1061 http：//kashii.fku.ed.jp
校長名	稲富　　勉		

〈学校概要〉令和３年度に創立100周年を迎えた伝統のある学校で、ファッションデザイン科は各学年１クラスである（他は普通科）。昭和24年に被服科が設置され、平成３年に服飾デザイン科に学科を改変、平成29年にファッションデザイン科に科名を変更し、履修内容を時代の変化に合わせて変えながら、将来、ファッション業界で活躍することのできる人材の育成を目指して教育活動を行っている。

実　践　の　紹　介

実施学科	実施学年	記載者氏名	
ファッションデザイン科	２年・３年	西嶋　祐子	

１　実践のねらい

令和元～３年度の３年間、文部科学省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(プロフェッショナル型）」の研究指定を受け、地元の企業等との協働事業を実践している。これらの事業では、高校生としての甘えを許さず、生徒を一社会人として扱っていただいており、地域の方々と協働しながら実社会で通用する実践力を高めることをねらいとしている。また、これらの事業は、生徒に身に付けさせたい力を明確化して、年間指導計画の中に位置付け、毎年継続して実施できるようにしている。

２　実践内容

（１）ホテルとのコラボレーション事業（箱崎ＪＫプロジェクト）

本校が所在する福岡市東区の箱崎地区にあるホテルとのコラボレーション事業で、秋から冬にかけてホテル内で生徒作品の展示と物販をし、そして12月には、ランチ付きのファッションショーを実施している。実施にあたっては、５回程度の合同企画会議を行い、代表生徒が提案した企画内容についてホテル側から助言をいただきながら進めている。作品展示と物販は、２年生「ファッションビジネス」（学校設定科目）で、ファッションショーは、３年生「ファッションデザイン」で取り組んでいる。展示では広報活動の一環として、ファッションデザイン科の３年間の取組について紹介している。ファッションショーでは、どうすれば来場いただいたお客さまに喜んでいただけるか、クラス全員で意見を出し合い、会場までの通路やホワイエに作品を展示したり、テーブルコーディネートを提案したりしている。また、どちらもチラシや動画を制作するなど、集客のための広報活動についても実践的に学んでいる。

合同企画会議

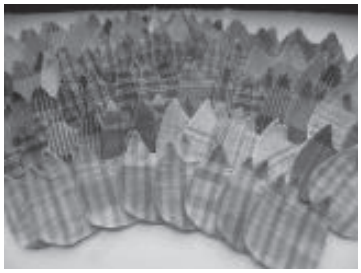
（２）校外でのファッションショー

本校では以前から、２学期から３学期にかけて地域の商業施設でファッションショーを実施し、生徒の学習成果を発表していた。この３年間、コロナ禍でそれらの場がほとんどなくなっていたが、学校近くの神社でフ

ァッションショーを実施することができた。実施にあたっては、３年生の「ファッションデザイン」で取り組んでおり、５月に校内の文化祭で実施したファッションショーをベースとし、会場の雰囲気や客層等を踏まえて演出や構成等を検討している。

（３）障害福祉サービス事業所との協働事業（コースターの縫製）

福岡市の東に位置する古賀市の障害福祉サービス事業所ではさまざまな授産活動を行っているが、その中の一つである「さをり織り」を使用したねこの顔形のコースターの縫製業務を本校生徒が担っている。事業所とは業務委託契約を結んでおり、３年生の「ファッションデザイン」の中で取り組んでいる。「さをり織り」は組織が粗く大変扱いづらいが、ほつれないように一つ一つ丁寧に製作している。出来上がったコースターは事業所で検品をしてもらい、合格したものは商品として販売されている。



ねこコースター

３　成果

（１）ホテルとのコラボレーション事業（箱崎ＪＫプロジェクト）

展示と物販では、商品を考える際に、ホテルの客層を調査しターゲット設定を行ったり、販売時期を考えて品揃えを検討したり、ポップやチラシを作成したりするなど、実践的な学習となった。また、これらの取組は、これまで広報活動の対象としてこなかった地域の方々に本校の教育活動を知っていただく良い機会となった。

（２）校外でのファッションショー

会場が屋外の神社であったこともあり、ランウェイの場所や長さ等について観客目線を考慮したり、開催を夕刻としたため、空が暗くなっていく過程も演出に取り入れたり工夫を凝らした。また、ポスターやSNSを使って広報活動を行うなど、ファッションイベントの企画や運営について実践的に学ぶことができた。

神社でのファッションショー

（３）障害福祉サービス事業所との協働事業（コースターの縫製）

商品として販売するためには、丁寧に縫うだけでなく規格とおりに製作し品質を安定させることが大切だということを体験的に学ぶことができた。また、ねこの顔形だけでなく生徒が考案したデザインのコースターも製作させていただいており、商品開発の学習もできている。さらに、事業所で働く方々と交流する機会をもつこともでき、大変良い経験となった。

これらの取組で生徒たちは、既習の内容を応用しながら主体的に取り組むことができた。加えて、校外の方々と協働することで学校内では経験することのできない貴重な経験をしながら、社会人としての振る舞いや責任についても体験できた。また、自分たちのスキルを活用することで地域の方々に喜んでいただく経験を通して、地域貢献の喜びを感じるとともに、自己有用感の高まりがみられている。

４　今後の課題

地元企業等との協働事業の実施にあたっては、年間指導計画の中に位置づけて継続実施しているが、連絡調整に時間がかかり、予定通りに進まないこともあるため、柔軟に対応できるように準備をしておく必要がある。また、実施後の引継ぎを充実させ、ブラッシュアップしながら継続したい。最後に、地域の方々をはじめとして、これらの取組の認知度がまだまだ低いと感じている。多くの方々に知っていただけるような広報活動を行いたい。

『地域を潤す源流となる人材』を育む
～学科の学びを生かし、地域との交流を深め、絆を育む～

学校名	宮崎県立延岡工業高等学校	所在地	〒880－0863 宮崎県延岡市緑ヶ丘１丁目８番１号 ＴＥＬ：0982－33－3323 https：//cms.miyazaki-c.ed.jp/6029/
校長名	山内　武幸		

〈学校概要〉本校は昭和19年に創立され、今年度創立78年を迎える。平成８年に家庭に関する学科「生活工学科」が新設され、平成29年に「生活文化科」へ学科改編となった。現在は工業科５学科、家庭科１学科の合計18クラスである。「立志・勉励・創造」の校訓のもと教育活動を行っている。

生活文化科は「生活工学科」の流れを汲み、２年生よりファッションデザインコース、フードデザインコース、リビングデザインコース（各４単位）の３類型に分かれ、専門性を磨いている。

学校のある延岡市は、旭化成創業の地である。

実　践　の　紹　介

実施学科	実施学年	記載者氏名	
生活文化科	１年・２年・３年		田牧　由佳里

１　実践のねらい

本校生活文化科では、「『地域を潤す源流となる人材』を育む」をモットーに、学科の学びを生かし、地域との交流を深め、絆を育むさまざまな教育活動を展開している。この活動の目標は以下のとおりである。

１　人とのつながりの大切さや思いやりの心を育む。
２　自分たちの学びに誇りを持ち、さらに学ぶ意欲を喚起する。
３　異世代や地域の方々との交流の中で絆を深め、より良い関係を築く。

２　実践内容

（１）市内小学校との交流

ア　お弁当応援隊～ひろがれ！弁当の輪～

平成23年度より、延岡市農政水産課、「みやざきの食と農を考える県民会議」東臼杵地域支部と連携して、その食育推進リーダーとともに地域に「弁当の輪」を広げるべく、地域の小中学校に「地産地消」「食品ロス削減」のお弁当づくりを教える食育活動を展開している。「フードデザイン（２年生類型）」の授業の一環として行い、実施時期はその年度の当該小中学校の担当者と相談して決定する。食材費は「同会議」支部の助成でまかなう。小学生が本校へ移動に使うバスは延岡市による。

献立作成は、コンセプトを決めるところから本校２年生フードデザインコース（16名）が行い、事前に小学校側に献立を提示しておく。

３・４限目に自分が作ってみたい「おかず」ごとに分かれて、高校生２名と小（中）学生で班編成をして作る。それぞれの班で作ったおかずを、一人ずつバイキング形式でお弁当箱に詰めて調理班ごとに試食する。試食後の５限目は高校生による食育講座とし、食品ロスや地産地消、出前講座で学んだ「地元のお茶を使ったお茶の淹れ方講座」を取り入れるなど、毎年工夫しながら実施している。

イ　地元の小学校のお弁当づくり支援・ミシン実習支援

①お弁当づくり支援～お弁当プチ応援隊～

前述の弁当応援隊を平成27年に実施したことがきっかけで、本校所在校区の小学校より継続して実施し

たいとの依頼を受けて、同じような内容でお弁当プチ応援隊を実施している。ただし、献立は小学校で作成し、材料費は小学校が負担する。「フードデザイン（３年生類型・16名）」の授業の一環として実施している。

②ミシン実習支援～ミシンレンジャー～

平成24年度から同小学校より依頼を受けて、小学５年生にとって初めてのミシン学習（ナップサック製作）の支援を実施している。「ファッションデザイン（２年生類型）」の授業の一環として実施し、小学生２人に対して高校生が一人付いて支援している。一人一人に目が届き、誰一人諦めることなく完成させている。

※お弁当づくり支援・ミシン実習支援は５年生２クラスであるため同じ日に設定し、１・２限目、３・４限目とクラスを入れ替えて実施している。日程は当該小学校と相談して例年９～10月に実施している。

（２）行政と企業との連携

ア　骨に関する講座

延岡市と旭化成延岡支社は「自分の足で100年歩ける健康長寿のまちづくり」協定を締結している。同社地域活性化グループの協力を得て、令和３・４年度、骨に関する講座および骨密度測定を実施した。

イ　市広報誌のカルシウムを多く含むレシピの連載

本学科では例年４月の遠足に合わせて「弁当の日」を実施している。令和４年度は学年ごとにテーマを設定し、令和３年度に骨に関する講座を受講した２年生は「カルシウムを意識したお弁当」とした。令和４年９月号から半年間、市広報誌の「骨粗しょう症予防レシピ」特集ページに生徒のレシピを掲載していただいた。

本校ホームページにも代表10名のレシピを掲載している。

ウ　社員食堂のメニュー提案

令和４年度も１年生対象に骨に関する講座並びに骨密度測定を実施していただいた。管理栄養士の指導のもとカルシウム豊富なメニューを考案し、試作やカロリー計算を繰り返した。社員食堂運営会社の料理長・栄養士に対しプレゼンテーションを行い、５つのメニューが採用され社食で提供された。社員の皆様にも好評を得て完売であった。「生活産業基礎」の授業の一環として実施した。

３　成果

・生徒は、自分よりも生活経験の少ない「小学生に教える」ことで、これまでの学びを児童にいかに分かりやすく伝えるか、自らの経験を通して「油が飛んでけがをしたら料理が嫌いになるのではないか」と火傷やけがなどの安全面への配慮等、事前に生徒同士で話し合い工夫して取り組んだ。
・当日はお互いに楽しみながら実習に取り組んだ。最初に出来上がった児童が満面の笑顔でナップザックを背負い、その様子を見ながら励まし合い、全員が完成させて満足そうな笑顔で記念写真に納まった。
・本校に入学してきた生徒に志望理由を聞くと、小学校時代に「延工生とお弁当をつくった・ナップザックを作った」という返答もある。たった１日、数時間の経験が４～５年後の進路に影響していることを考えると意義のある取組として定着している。また、小学生やその保護者に対して学科のPRにもつながる。
・メニュー提案のプレゼンテーション、社食での提供に至るまで、さまざまな科目での学びを生かして、動画編集やPR活動等たくさんの経験を積むことができた。専門学科の学びの延長上にある大人に対して、自信を持ってプレゼンテーションを行うことができたことが、最も成果が大きかったと考える。

４　今後の課題

地域との交流や自校以外と連携して活動するとなると、細かい打ち合わせや感染症対策が必要となる。生徒（児童）に達成感や自己肯定感を味わわせたいと思うと、つい指導者も力が入ってしまう。正直、昨今の働き方改革と逆行していると感じることもある。試行錯誤しながら、よりよい方法を探っていきたい。

「課題研究」における地域支援活動

学校名	宮崎県立飯野高等学校	所在地	〒 889-4301 宮崎県えびの市大字原田3068番地 TEL：0984-33-0300 http：//iino-hs.ed.jp/
校長名	間曽　妙子		

〈学校概要〉 本校は昭和40年に創立され、創立59年目を迎える。熊本県と鹿児島県の県境にあるえびの市唯一の県立学校である。開設当初より１学年３学級で、普通科２学級、生活文化科１学級の小規模の学校である。地域との協働による実践型・課題解決型の探究学習を推進し、学校を拠点とした「共学」「共創」によって地域魅力化に貢献することをゴールイメージとしている。企画運営に当たっては、本校のみではなく魅力化コアチーム(市役所、地域団体、地元企業、地域起業家、大学等で組織)での協議をもとに行っており、地域共同が持続可能な社会構築につながっている。

実　践　の　紹　介

実施学科	実施学年	記載者氏名	
生活文化科	２年・３年	松浦　真由美	

１　実践のねらい

生活文化科は、衣・食・住や保育分野のスペシャリストを目指すカリキュラムを展開し、豊かな人生を送るライフデザインについて考える家庭に関する専門学科である。令和元年度から、えびの市をフィールドとした「地域支援活動」を２・３年生の生徒を対象に本格的に始動させ、今年度で６年目になる。課題研究の時間を活用して地域に根ざした活動を実施することで、同市に還元できる人材の育成を目指している。

２　実践内容

地域支援活動は２年生から取組が開始されるが、その前段階として１年生の総合的な探究の時間において普通科と合同で地域を題材に学習を展開する「えびの学」を実施している。「えびの学」では一から考えて主体的に判断し、問題を解決するために必要な資質や能力を育てていく。地域の特長に理解を深めることで、２年生からの地域支援活動に結びつけていくことがねらいだ。

２年生からの地域支援活動は「課題研究」（２単位）で実施し、クラス全体で企画し実践していく。新聞紙を用いたエコバッグ作り（写真１）、廃棄されていた傘を用いたエコバッグ作り、フードドライブ（写真２）、えびの産業祭りおよびえびの市図書館の祭り（写真３）に余り布を用いた小物作りによる出店等を行っている。

写真１　新聞バッグ

写真２　フードドライブ

写真３　図書館祭り

３年生では、１・２年生で学習した内容を更に深め、２年生に引き続き「課題研究」（４単位）で社会の課題を高校生の視点で解決する探究活動を実施する。実施時期は５月から 10 月まで、夏休みを除き約５ヶ月間８カ所の事業所（その年の生徒数等状況に応じて事業所数は決定する）に分かれて週に１回２時間（約 15 回程度）活動を行う。さらに、残りの２時間で、自分たちが高校で身につけたスキルで還元できるものは何かを考え、それを地域（事業所）での活動でアウトプットする。

クラス全体の活動としては、ちびっ子運動会（写真４）、子ども食堂（写真５）、えびの産業祭りの出店（写真６）などである。

写真４　ちびっ子運動会

写真５　子ども食堂

写真６　えびの産業祭り出店

事業所での活動では、お礼の小物作りやさまざまな企画を行い、活動を行っている。

写真７　企画したレクリエーションの様子

写真８　若手農業団体との作物栽培

写真９　幼稚園での活動

３　成果

３年生が校外での支援活動を始めて６年目となる。まだ、活動を行う中で課題はあるが、生徒たちはこの活動を通して様々なことにチャレンジしている。１・２年生で培った基礎知識を生かして地域の方々への発信ができ、そして自ら考え「課題研究」を通し実践している。（図１・２）そのことがえびの市を守り育て持続可能な社会の構築につながっていると感じている。（図３）この活動を通しての生徒たちの成長は目覚ましいものがあり、グローカル発表会では全国から集まった方々へ自信を持って発表をすることができている。

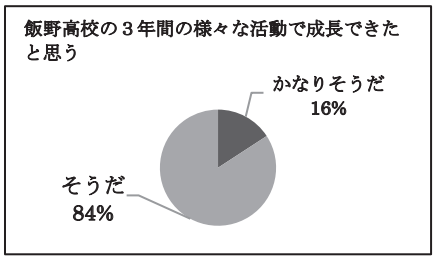


図１

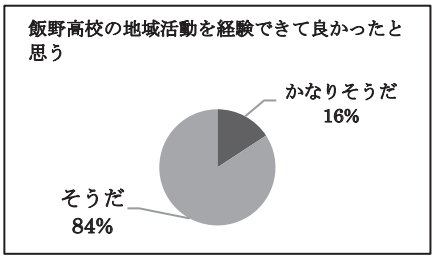


図２

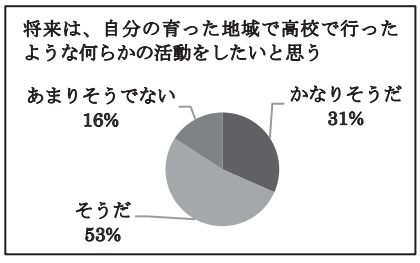


図３

４　今後の課題

地域支援活動を本格的に実施して６年目となったが、生徒たちの本事業による取り組みが、高校を核とした地域創生に強いインパクトを与えていると実感している。地域とのつながる活動は、「社会に開かれた教育課程」の実現とカリキュラムマネジメントの実践にもつながっている。今後は、少子化に伴い生徒数が減少しているため、更に魅力ある学科になるよう発展的な取り組みをしていきたいと考えている。